毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年、五月二十五日發兌

第七拾八號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるスコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を瘦せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば橫濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

橫濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	鳥居德兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田清右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

今後の國民新聞

主筆德富猪一郎 記者深井英五二氏は去る二十日を以て横濱出帆歐米漫遊の途に上る今後の國民新聞は二氏か漫遊各地より續々送稿する見聞記事論文隨感隨筆等新奇の記事を逐日の紙上に連載し現今世間一般の新聞紙面に寂寥無事の憾みを抱く太方讀者の渇仰に對し聊か一新生面を開くの覺悟を有せり

國民新聞が近く日清戰争の限に在りて及ぶ限り能ふ限りの勞を盡し聊か操觚者責務の萬一を完ふするを勉めたるは世間具眼者の認識する所ろ、今や該戰争の初中尾を一貫して日本を世界の新舞臺に登場せしむるを勉めたる國民新聞は更らに世界に新たなる日本を膨脹せしめ日本に新たなる世界の眞相を紹介せんとす其大膽寧ろ自から驚くべきものあり然れども讀者にして我國民新聞の精神を看取するものは蓋し徒らに其大膽を笑ふことなかるべき也

所謂「日本的眼光を以て世界を觀、世界的眼光を以て日本を察し」我國民をして此智識に富ましめ自信自奮以て我國運を前途に伸張するは上に偸安の君子宰相多く下に射利獵官の政徒絶へざるの今日愈よ益〻其急須を見るにあらずや

國民新聞は社員を內地各方角に巡廻せしめ實業の發達政黨の眞相等苟も國運消長の上に關する事項は可成之を實地に觀察し極めて精通敏明に報導通信せしむることを勉む今現に其端を發し京阪に實業擔當の記者を特派し在り

國民新聞は時々特色の記者を探險窟に派遣し世に未顯なる社會的隱微を發掘し社會發達改良の資材を紙上に連載す足尾銅山を探險せしめたる如き其手初めとして見るべし

國民新聞は多量多雜の博載を以て其雄を誇ること能はざる迄も常に其大潮流大萌芽を敏察明示して經濟家實業家の一種有用なを益友たらんとを期する近時文明的商業家の大部面に愛讀者を增加せるものは其明證たらずんばあらず愛山停春湖處子AB子蘆花生長風生春夢紫嵐生諸氏一層精到の筆を揮ひ新聞紙面に其光彩を擴充するを勉めんとす

五月

國民新聞社

THE TWELVE MEN OF LETTERS

十二文豪

緒方維嶽著

號外 シルレル

定價十八錢　郵税四錢

獨逸近世の二詩星は、ゲーテとシルレルなり。前者は邦人多く之を說く。後者は未だ人の傳し、評論したるものあるを聞かざる也。

シルレル何人ぞ。彼れが文學上の產物は、能く幾莫か詩神の寵愛を蒙れるか。能く幾莫か光大超邁の理想を發揮したるか。其哲學は如何。其歷史は如何。其詩篇は如何。其戯曲は如何。此書は此問題に答へんが爲に、其著作を審議し、其人物文學を評論したり。

著者が此書を著はすや、初め其傳記を誦し、大に其盤根錯互せる生涯に同情し、悲懷限りなく、興味限りなく、爽快限りなき感嘆を發したるに依る、

シルレル四十五年の生涯、僧侶たらんと欲し、醫學生たらんと欲し、英國に去り、米國に走らんと欲し、遂に其天職を覺悟し、詩人の最大光榮を冠するに至る。其間出奔あり、失戀あり、厭世あり、流浪者と成り、推拓者と成り、勝利者と成る。多情多感、妙思麗趣溢る。

若し夫れ叙字文章の巧拙、着眼立論の高下に至ては、讀者幸に是れが清判を下せ。

著者は唯深くシルレルに感嘆し、シルレルを未知の人に紹介せんと欲するに急なるが爲に、此書を出せるのみ。微意の存する所實に玆に在り。敢てシルレルを傳ふと云ふに非ざる也。

◉早稻田文學評　『シルレル』『十二文豪』の號外なり體裁すべて他の號に同じ、文章も結構も、はた其の出來榮も、他の號に比して、伯仲の間と許すべし、總じて『十二文豪』の最長所は、其の文の花やかにして言ひまはしの巧みにして、多少の直譯的文病あるに拘らず、一たび卷を開く者をして、知らず〳〵全卷を讀了せしむるの才藻にあり、而して此の篇の如きは此の長所を具へたるが上に、諸書を參照せられたりと見えて、主人公が性行、著述に關する評論も(語に泥まずして意を酌めば)おしなべて穩當中正、此の書はた青年社會の文庫中に列すべきもの

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英國　ギッピンス著
日本　水上梅彦譯

英國產業史

鮮明なる挿圖四葉入
上巻
定價二十五錢
郵税四錢

◎東京朝日評　英國ギッピンス氏の原著を譯せるものにして本巻はノルマン種族占領前より十八世紀の中葉工業革命の劈頭に及ぶ乾燥の弊に陥り易きものたるに係はらず却て趣味の津々たるは悦ぶべし

◎日本評　英人ギッピンス氏の原著を水上梅彦氏の譯したるものなり本巻叙述する所凡て四期にして那耳曼種族占領前の英國より自十六世紀至工業革命劈頭さいふに到る實業家の一讀を値すべし

◎教育時論評　本書は、英國ギッピンス氏の原著を譯せしもの、第一期には、那耳曼種族占領前の英國、第二期には自那耳曼人戰勝至顯理三世治世、第三期には、第拾三世より第拾五世紀に至る、第四期には第拾六世紀より工業革命の劈頭に至る産業上の沿革を叙述し、讀者に一種の趣味を覺えしむ

◎時事新報評　英國産業史は英國ギッピンス氏の原著を水上梅彦氏の飜譯したるものにて第一期より第四期までを上巻さし民友社より發行したり定價は廿五錢にて紙數二百頁

◎日々評　英國ギッピンス氏の原著にして歐洲に於て喝采を博せる近時の好書なり第一期那耳曼種族占領前の英國第二期那耳曼人戰勝より顯理三世に至るの第三期第十三世紀より十五世紀に至る第四期第十六世紀より工業革命の劈頭に至る間に於ける英國商業上に生起せる大事件を叙述せり譯文は例の民友社獨得の雄健流暢壯快なる筆乾燥に陷いるの弊を避て巧に原意を寫せり唯々譯者少しく卒業を急ぎ間々省畧に失せるが如き迹あるは遺憾なれども大意に於ては充分譯出して決して杜撰の點なきは亦多さすべき也

◎大坂毎日評　本書は英人ギッピンス氏の原著にして水上梅彦氏の飜譯に繫り上巻を第四期に分ち第一期は那耳曼人種占領前第二期は那耳曼人戰勝より顯理三世治世に至り第三期は第十三世紀より第十五世紀に至り第四期は第十六世紀より工業革命の劈頭に終はる土地所有者及耕作者都合及同業組合製造及貿易羊毛貿易及製造工業上の村落及陳列館大疫癘さ其經濟上影響農民の蜂起勞働社會の隆昌第十七世紀及第十八世紀間に於ける農業進歩の狀況等を叙述して餘蘊なし

發兌元　民友社
東京市京橋區日吉町四番地

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿九年五月廿五日發行

家庭雜誌第七拾八號

目錄

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



明治廿九年三月廿五日發行

家庭雜誌第七拾八號

目録



家庭雜誌第七拾八號

（明治廿九年五月廿五日發兌）

社説

家乘日記

日々一家の中に起りしことゞもを記るし置くものを家乘とも日記とも云ふなり。昔しより公卿たちの記るし置きたまひし日記の今日に殘れるものは、其頃の最も信憑すべき歴史の材料となりて、史家に珍重せらるゝとなるが、日記の益は勿論史家に材料を供するのみならず、之を記るし置く者の爲めには身を修め、人に接し世に處するの誡ともなり、子孫の爲めには祖先の如何なる人にして如何なる行を爲せしかを詳にし得るの便ありて、中々に利益多きものなり。

經驗ある老人の語れるを聞くに財布を持たぬものは如何に收入多き人にても所謂「ごろつき」なり。小遣帳をつけぬ細君は必らず其夫を泣かしむるといへり。日記を付るといふことは容易なることのやうのやうなれど其實は隨分面倒なるものなれば、つけぬ人の多きは世間一般のとなれど、熟ら思ふに日記をつけざるは精神上の財布を持たぬもの、智識上の小遣帳をつけぬ者にはあらざる乎。人の智識は唯眼より入る者に限る者かは、耳より入るものこそ所謂實驗實聞にして其人を益する讀書にまさること萬々ならずや。さるを雲煙過眼にして少しも之を記憶に止ることをせざるは、天の我等に與ふる寶を空ふするものと曰ふべし。

日記をつけざる者は道徳上の無責者たるを免れず、我等は日常の行爲につき後世子孫に對し、郷黨朋友に對し申譯のあるやうなし置かざるべからず。日々に我等の行爲を記るし置く時には我等は自然此日記を讀むべき人に對して深き責任を感ずべし。恰も遠方の父より

學資金を送られたる子が、其學資の使用につきて父に向つて責任あるが如く、我等は天より與へられたる時間の使用につきて道徳上の責あるものなれば、此申譯の爲には是非とも日記を記るし置かざるを得ず。

朋友に事を依賴せられ、若しくは我方より進んで朋友に盡すべき義務ある時も、記臆乏しきが爲めに、知らず識らず無禮に流るゝとなきに非ず、こは日記を付けざるよりの過なり。

總て智識といふものは之を言語文章に現はして而る後に眞に我物となるものなり。日常聞き得たることを文章になし置くは自然に我智識を堅くする者なり。

我等若し日記なき時は我等の精神は日々同じ事を繰り代して、常に同一の範圍の中に彷徨ふの恐あり。君子の學は日に新なりと曰へば日々發明する所を記るして更に其上を求むるは是れ人品上達の道なるべし。

されば家の主人たるもの、主婦たるものに限らず、苟も筆を取り得んものは必らず日記を記るし置くべし。小兒には早くより日記を記すとを敎ふべし。荻生徂徠は幼時より父の日記を代書したるが爲めに文章の功を進めしといへり。

楠公家訓

珍膳も毎日向へば味甘からず○書は筆法を踏まず達者なるを善しとす○善事をなすを思はんよりは惡事をなす勿れ○物事に肝要を知れ○食は腹一ばい○貪慾を思はんよりは恥ることを知れ○鷄鳴に起きざれば日暮に悔あり○人に善事を施し報を思ふな○節儉質素は堅城の如し○驕奢慢心は讎敵の如し○己れが身を思ふて人を害ふなかれ○身の分限を知るを直さす○拔群の大功を立てんよりは二君を思ふな○勝にほこりて敗をさる勿れ○心に剛を好めば柔よりして勝をあらはせ○人を知り己を知りてこそ業に强し○業は日々新にすべし○遊惰に過ぐれば財貧し○事節儉なれば事福の基○謙遜のものは遂に倖來る○不遜のものは終に災害を來す○業をはげみて家内睦ければ磐城の如し○家内不和なれば身代を失ふ基○火を能くたしなめ

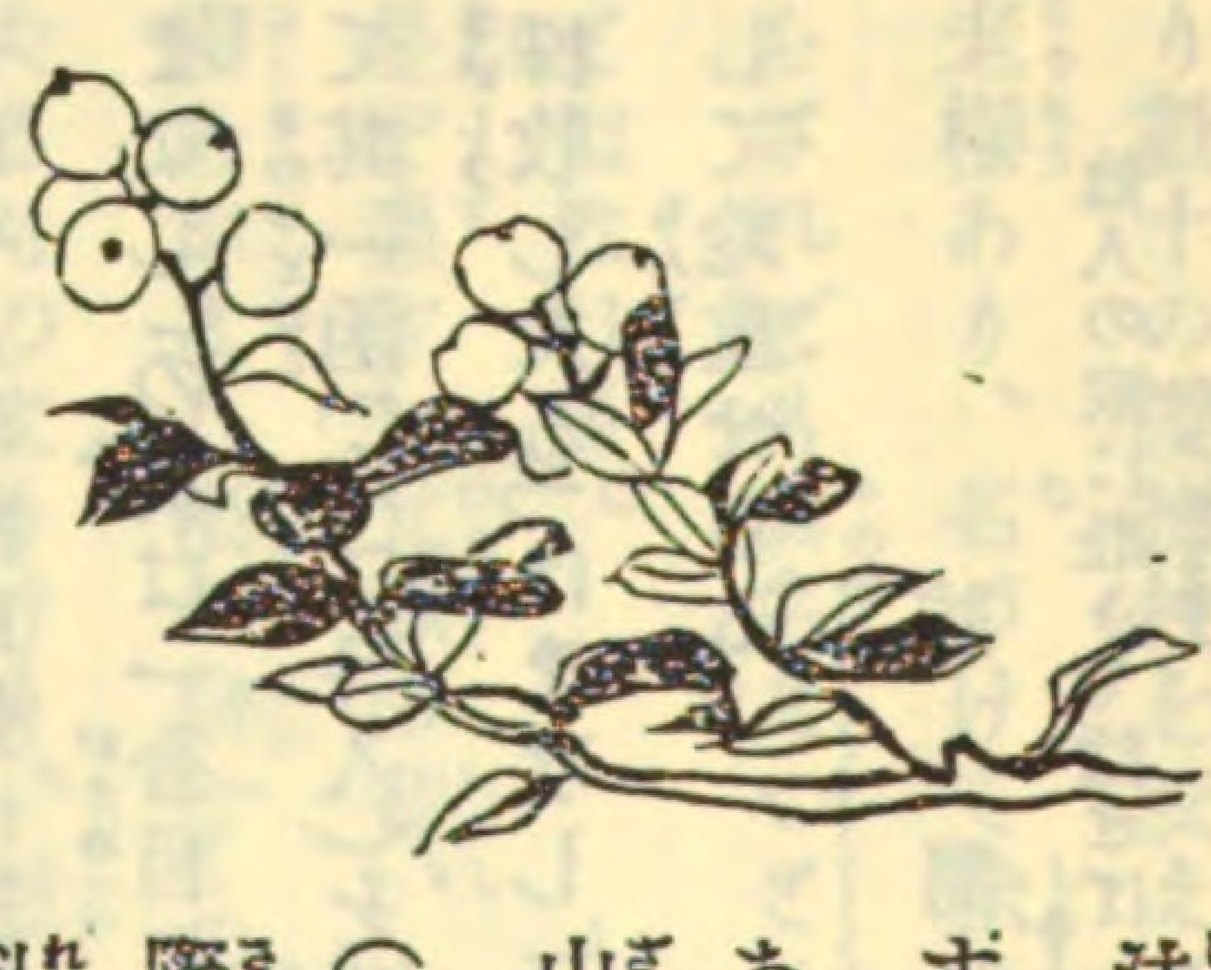
科學

はまなしの話

近來一種の風味ある「ジヤム」世間に出でたり、其は「はまなし」(おやまりんごともいふ)と稱するものにして、富士山の名產とす、此植物は學語Vaccinium vitis idaeaと言ひ越橘科に屬する矮樹なり、重に富士山に生すれど日光、木曾、及び御嶽等にも自生す、其形は挿畫に示せるが如し。

追々富士登山の期ともなりぬれば、登山者は必らず實地に見らるゝとあるべし、富士山の「はまなし」は此山の三合目邊より四五合目(海面上六千尺乃至八千尺)の高位地に自生し、殊に最も多く繁生するは、樅及落葉松の甚だしく繁茂せる處を過ぎて稍薄らぎたる日當りの宜しき處にあり、其方向は南西の岩石地にありて東方須走の如き砂地に生せざるなり。

此植物は土用ごろに開花し(即ち富士登山の頃)秋の土用頃に青き果實を結び、一度雪をかぶりし後ならでは美しき赤色の連珠を見せ、甘酸の味を有するとなし。」



近年はこれを採收することゝなりしが、今其採收の方法を聞くに、之を採用せんと欲する人は秋の土用頃に一度降雪ありて一日融解するを待ち、登山に熟練せる倔强の山民一團(五六十人)を雇ひ、先づ登山の際には、其の採收中に要する食料を始め、採收器及び夜具を脊上に負ふて登る、第一日目には第一合目に宿泊し、此宿泊處を根據地と定め、五六日の間「はまなし」の果實採收のため、朝に出でゝ夕に歸る、其扮裝は綿布の袋と味噌漉笊幷に其日の食糧とを携帶し、五六人宛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一隊となり、實のある處を探して採取に從事す、而して其場所に至る間は、別に路もなく且つ甚しく危險の所を行かざるべからざるが故に二三人相互に紐を結びつけ、嶮難なる岩石を辿り傳ふて或は上へ或は下へ傳ひ行くこととなれば



其危險非常なりといふ。

さて果實を摘み取るには、先づ味噌漉笊の遠く谷底に轉落せざらんがため、之を半ば以上程も土中に埋め、採集人は立膝となりて地上數寸に伸びある枝に累々たる赤色の小果實を、手にて其笊にこき入れ、笊に滿つれば之を各自首に懸けし袋に移し午後の三四時頃に至れば其根據地に引揚ぐるため歸途に就くといふ。

一日一人の採取量は三升位にして、其の採收したる「はまなし」の實は一合目に石油罐入の空函に詰め、一人にて其一函(凡二斗入)を背負ひ馬返と云所まで下山す。

採收したる「はまなし」は鹽漬又は「ジャム」の好材料として珍重せらる。

訪問の時刻

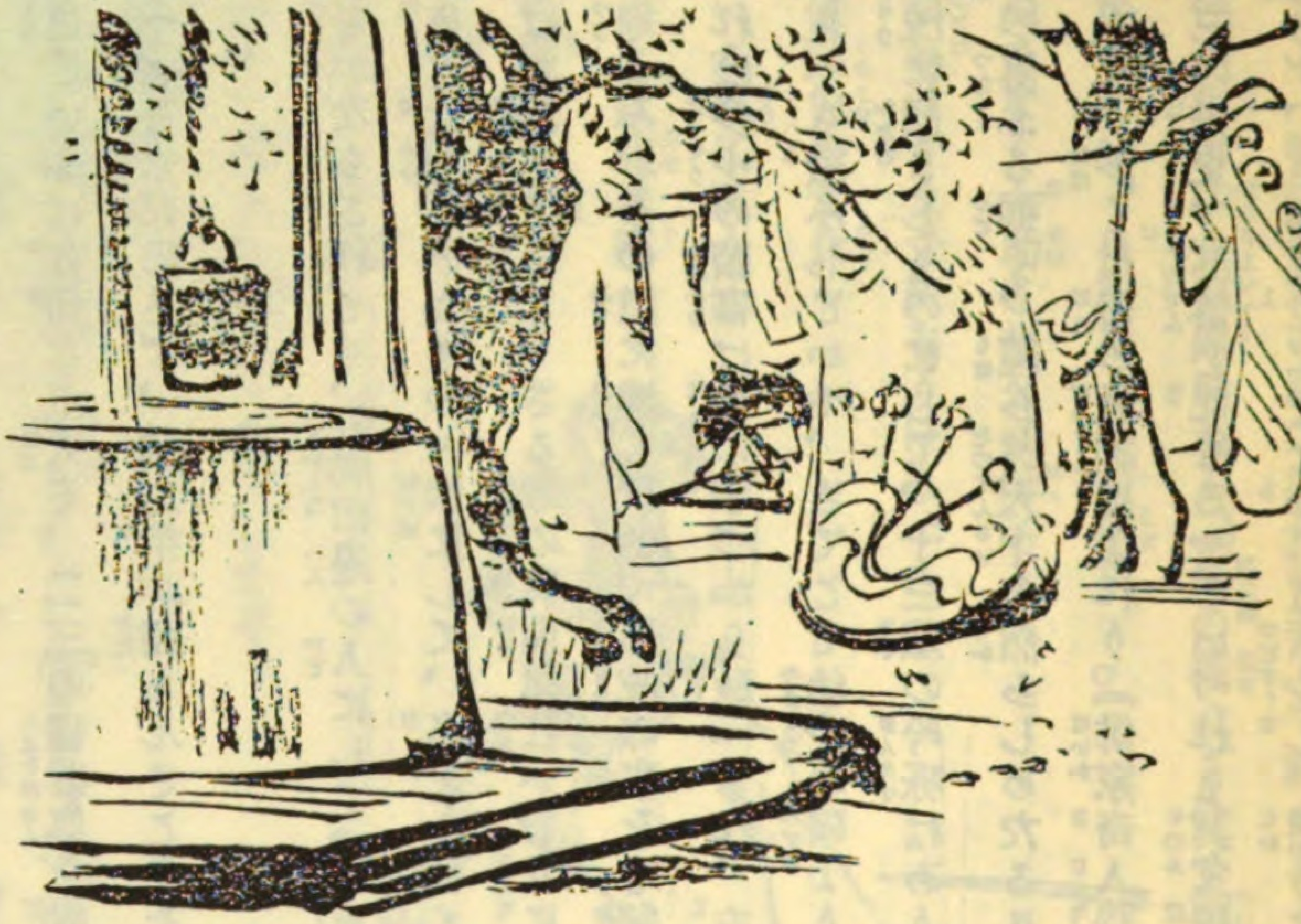
他人の家に赴きて話せば須く朝餐晩餐の時を避くべし主人事あるの時を妨ぐべからず　(貝原益軒)

実談

俳女秋色

三霞子

清朗の天、満街塵なく、薫風人の怒を解いて百花開くるの時、諸子或は父母に誘はれ或は朋友相携さへて、上野に遊びし事あらん。車馬絡繹たる三枚橋を打渡り、數十の石階、階一階と



登り行けば、實にや都門第一の春、早櫻色を競ふの處、明治維新の史に名高き彰義隊の碑たてり、碑前今に香火絶えず、碑を西北に去る數十歩、朱のたるき色かんさびたる堂宇あり、これなん都東山の名勝清水寺の面影を東にうつせし名高き上野の清水堂なり、堂のあたり數十の櫻樹枝を交えて連なる處、やゝ離れて一株の老櫻あり、名づけて秋色櫻といふ、樹甚だ大なるにあらざれども其名もつとも人口に膾炙し、上野八景の一とはなれり。

是ぞ過ぎし元祿の昔、十三歳の少女秋色が『井戸端の櫻あぶなし酒の醉』との一句、水莖清き短冊を枝につけたるものなりけり、然して此句こそ其頃の法親王の御目にとまり、御感の餘秋色は、おほけなくも御前に召されて、多くの褒詞を頂きしは實に異數分外の譽にして、又俳諧の美談なり、秋色は其句により頓に名高く、樹は其人のによりて世に知られ、星霜こゝに積むこと

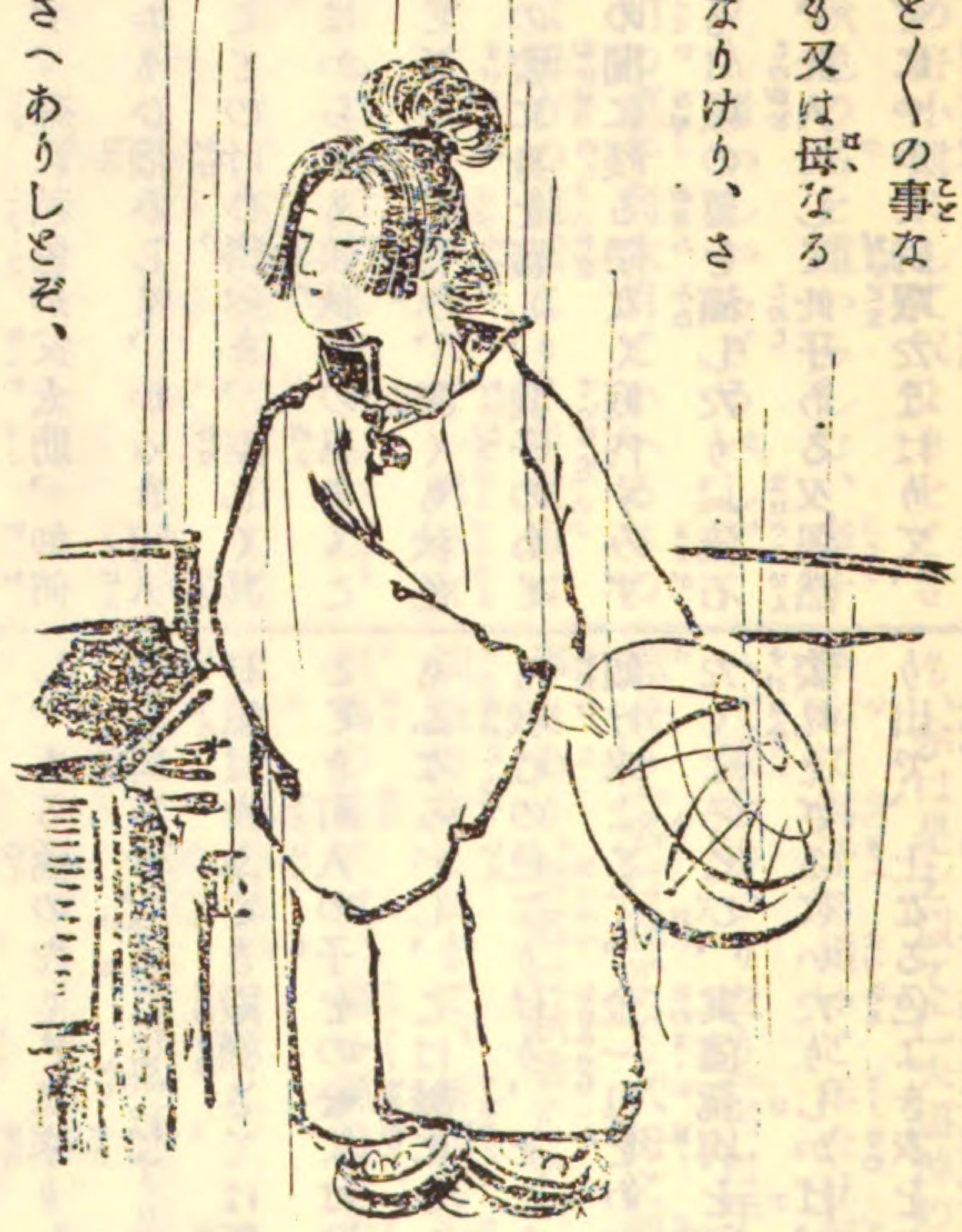
二百、依然其人の名を擅えり。

さて其秋色といふは如何なる人ぞ、二三の書其傳を説けりといへども未だ盡さず、請ふ余が語らんところを聞け。

其姓は詳らかならざれども、外神田邊の人にして、代々紙商を營める太助といふもの丶娘にして、名をお秋といふ、母はお雪とて久しくさる方の奥向に仕へし女にして、普通よみかきの道に達し、や丶風流の事をも解せり、されば多少の讀書は母の手づから教へられ、古今集などさへも讀みしとかや、さてこそ幼少の砌より心や丶風流に傾きしものにして、十三歳の吟詠はありふれの書の傳ふる如く、純ら其天才の然らしめたるものにもあらず、多くは母の教訓によれり。《俳家奇人談を始め二三の俳史、其傳を記せるものいづれも其父母の事を語らず、されば世にそを知れる人少し、然るに去る頃或人の藏せる手文庫といへる寫本の隨筆を見しに、中に此事の記されたりしかば寫しとりて保存せり、もとより一片の疑ひなきにしもあらずと暫く記して大方の教を待つ》

十三歳の吟《前にいへり》を以て世人其初咏なりと傳ふれども、これあながちに然るにあらず、其以前に於ても時にふれ折にふれ、句作ありしと手文庫の記者はいへり、されども何故にそを漏せしや其一をだも記せざりしは、余輩の尤も遺憾に思ふところなり、後其角の門に入りて俳諧をまなびしに、天成の伎倆日を追ふて進み、秋色が名は俄に都門に騒がしく、語りつたへいひつたへ、《近き例をとれば當今の作家一葉女史の評判に似たり》或は見ぬ戀にあこがる丶もの、又は其風流をめづるもの多き中に、其頃芝の或處に住みし士人榊原何某が二男縫之助といへば、いたくも思ひに心を惱まし、如何にもして秋色に近づかんと、日ごと／＼其家に來りて、不用なる色紙短册など求め行けり《恰も

當今の書生が巻烟草さては西洋小間物など買に行くにも似通ひたり、嗚呼當年の縫之助今に至りて絶えざるも風流秋色が如き少女何處にある、」始の程はさほど馴々敷もなかりしが、日ごと／＼の事なれば、いつとなく太助とも又は母なるお雪とも詞かはすまでになりけり、されば遂には秋色とも折々はものいふ樣になりたり、是よりは店に來ることと日に增して多くなり行き、來ては樣々の話に時をうつし、或時は夜にいりて歸りし事さへありしとぞ、（皆手文庫の說なり）さればいよ／＼近くに從つて思ます／＼增さり、今は早たえ得ずして、思ひのたけを細々と書きて私かに送りしに、秋色は其封さへもきらずして『ものゝふの紅葉にこりず女とは』との一句を其裏に書添てかへせしかば、縫之助は大いにはぢて切なき思を漸くにしてたちしとかや（此句はいはずとも知れし紅葉狩の故事をひいて戒めたるものにして俳句の價値さほど上乘のものにあらず、ただ此事實あるが故に名高きなり）



あるやんごとなき人（冠里公なりとも、又は母の嘗て仕へし方の奧方なりともいひ傳ふ、兩說ともにさだかならず、されども冠里公との說或は眞に近からんか）其名を聞し召し、其俳諧をきかんとて態々御使者して召し玉へり、（千代女

加賀の大守にも見えしとゝもに好一對の美談なり》然るに其邸の庭園といふは、實に名匠の手になりしものにして尤風流好事を極め、其名都門に喧しく、見まく欲するもの一にして足らず、殊に秋色が父太助、如何にもして一度見んと兼々おもひ惱みしも、かるき町人の身として、いかでさることの叶ひ得べき、空しく其望をたちたりしに、此度はからずも娘秋色の召るゝこそ實に此上もなき折なりとていたく喜び、深くも秋色に言含め、己自から供人の姿に身を窶し、我子のあとについて邸に至り、供待の間に殘る隈なく庭内すみずみまでも見終り、思はずも日頃の望を滿したり、《流石は俳女秋色が父なりけり、此人にして此子ある又偶然にあらざるなり》さるほどにやがて御暇たまはりて、まかで歸らんとなしゝに折柄俄に天かきくもり、大雨急にいたりしかば駕輿を命じて送らせらる、娘は悠々として駕輿に座せるも父は小さき竹子笠をかぶり、合羽にやうやく雨を凌ぎ從ひゆく、孝心つねに淺からざる秋色いかでそを心苦く思はざるべき、如何にもして父に代らんとおもふも詮なし、漸やくにして思ひ運らし、ある橋のたもとに來りし時、かごかきを呼んでかごを御させ、今日は思はずも御身等の世話になりたり、日頃はたふとき殿樣さては奥方の御供すべきに、我等ごとき町人の子をのせてはせなんこと、さぞ心うくおもふなるべし、こは誠にさゝやかにして耻かしけれども我心の色なりけり、そこらよき處にて心よく一杯を傾け來よとて、金一包をあたへければ、かごかきはいたくよろこび、其儘駕輿を御して去れり、かごかきの姿見えざるにいたりしかば、此間にとて秋色はかごより出で、上なる色よき衣をぬぎ、下着の上に父が被りし合羽をまとひ、唐輪に結べる頭に竹子笠を頂き、美しき脛にむくつけき草鞋をつけ己れ供人となりて疲れたる父をかごにのせ、雨中に立てかごかきの歸り來る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を待居たり、やがて彼等はかへり來り、やをらかでをかきあげてひた急ぎにいそぎゆく、あとに秋色も亦ひた走りにはしりて我家にかへりしをかでかきは遂に知らで止みしと（誠に一篇の好小説にして又よきをとぎはなしなり、此一事優に秋色の名を重からしむ、孝子傳中につらぬるともゆめ〳〵耻かしからざるべし）

其後妙齢十八の春、照降町の菓子商大目といへるものに嫁げり（此大目といふは母方の親戚なりと手文庫は告ぐ）夫婦相和して一家ます〳〵榮へ行き、一男一女を擧たりけり、三十五歳にして夫に別れたりしかば、自から多くの奉公人を指揮して、家道更に怠ることなく、俗事蝟集の中におても全く風流の事を捨てず、時に名吟多くなれり、（『雨たれに袖もあやめの匂かな』『ひとり居や志がみ火鉢もよはのとぎ』『すゞしさや日のをちかゝる海の上』などはいづれ此間の吟なり、殊に『ひとりゐや』の句は、孤衾水の如き夕、なきおもかげを追想して、おのづからなる悲みの吟『おきて見つねてみつかやの廣さかな――千代』に比ぶる、決して決して劣る色なし、さればかくぞとの詞書もなけれども、余は是を以て亡夫追悼の吟なるべしと信ずるなり）やがて其子も追々と年たけ行けば、長男には嫁をむかへて家をゆづりたり（名は手文庫にもなし）女は或方に嫁せり（名は花といふ、母に學びて時に俳席に連なりし事もあり、俳名は秋香といへり）されば秋色はいよ〳〵閑散の身となりて、所謂有髪の尼法師、なき人の追善供養の外には、唯々風月を友として、心を吟咏に旺ままま日を送れり。

業なりて俳名ます〳〵世に名高く、來り學ぶものさへも、少からざるまでに至れり。

師なる其角は世の人も皆知るごとく、誠に蕉門の醉李白、酒に明けては酒にくらし、磊落不羈にして住處さへも定めでありしかば、晩年に至りて困難の節多かり

しを、秋色己が別荘に入れて、萬づまめやかに奉仕せしかば一ゞ乏しき事を覺えず、流石豪放の寶晋齋、眼中殆んど宇宙なきの人も、いたく其篤き心に感じ、いと喜しき事に思ひしとぞ、さればそがもつとも愛せし半面美人の點印（冠里公より賜ひしものなり）の如き、他の門人には傳へずして、秋色にこそ讓りたれ、秋色は師の歿後暫くはそをおのが點印として使用せしが、後は又これを湖十に傳へたり。

享保十年四月某の日『みしゆめのさめても色のかきつばた』辭世の一句を殘して逝けり。

一代の吟詠其の二三を左に錄せん。

井戸ばたの櫻あぶなし酒の醉
ほとけゝきて心おかるゝ蓮かな
きじの尾のやさしうさわる菫かな
戀せずは猫の心のおそろしや
あまたれにそでも菖蒲のにほひ哉
ひとりゐやしがみ火鉢もよはのとぎ
しゞみとり早苗にならぶをんな哉
もののふの紅葉にこりず女とは
これぎりとおもふ日もあらん相撲取
交わりを紫蘇の染たる小梅かな
みすさげて誰が妻ならん涼舟
すゞしさや日の落かゝるうみの上
底白に紅はきのこすつゝじかな

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

長者禁歌

元祿重寶記

公事ごのみ後悔短慮おてしきに物爭ひやけんくわ禁制」さし出者人の口入手がらだて天道まかせ破り氣ないめ」長居して我身ふけりの長談くはんぼうだてやたいくつないめ」善惡の人・の難くせいひならし賢人だての自慢きんぜい」不行儀に夫婦いさかひ遠あろき女房さるは大の禁制」正直に無慾の人のさめるこそうさくの道のよき手本なれ」すぐに行道をば知らで人

毎によこ道行て踏迷ふかな」身の内の心は主人目は奉行手は奴ぞさゆだんばしすな」世の渡りゆたかにすむぞうらやましせわく〳〵しきは見るも詫しき」心をばつかふとなくやすめ置身をばひまなくつかふべきなり」直に明我見て人をうらむべしとかく詐り多き世の中」身のあだは博奕大酒いろ好み非公事さんよく好む人」人がらの善き皮きたる犬もありおもてにめでて心許すな」

文藝

小供新聞

園部棨嬌

茲は或私立學校の二階である、顔に書く子と手に書く子、人形書く子は頭掻く、實に寺小屋の文句を其儘の騒動、實以て云へば昔秀才は少く、十五のよだれくりや、墨べつたりの長松が多い、が、女座は流石に春淺けれど、満更眺が無でもない。

最早三時少し過たので、大概は歸つた、然し例のよだれくりを頭領に、長松が殘つて、何か頻りに書て居る、唯覩ると半紙を兩ツ折にして三欄に區別し、欄の初に小説雜報と少し太く、妙に珍奇て書た躰が、何處か新聞らしく思はれる、デ、表題が『小供新聞』、其下に新暦舊暦潮の満干天氣豫報が書てある、所で其が前日のだなぞは餘程の愛嬌である。

而して繪入だ、虎を書て猫は未だしも、竹を添へて證明も出來るが、犬と馬の區別もなく、確に犬の話とあつて、未だ疑はれるとは、實に感服の外はない、ガツ、黒白を塗別てワン〳〵キャン〳〵の詞、イヤ吠書は丹精の程察するに餘りありだ、所で雜報と來ると又面白い、先其一二を記せば標題に大概『太郎さんの馬鹿』『次郎さんの泣虫』なぞとあつて、事件は大同小異、結句は毎『好ひ氣味〳〵』か、『先生にいつゝけるぞ』とあつて、圏點付の字句は、必しも假名を要するの文法である。

茲にも治安妨害の悪弊が行はれて、時々發行を停止される、右は友達を罵倒仕過ぎた時で、師匠が即ち警視廳である、本日發行の新聞紙上と來て、停止を命ぜられた時は、女座から『好い氣味ですワ』と冷笑を受るのが平素で、是は毎々女權擴張を防ぐるよりしてだと、よだれくりは云た。

今日も稽古を終た後で『小供新聞の編輯が初められた、假によだれくりと稱だ逸茂樂大、假に長松と云た嘘尾吐藏、此兩人が專ら編輯の全權を握つて居ると見え、茲に不圖意見の衝突を起した、

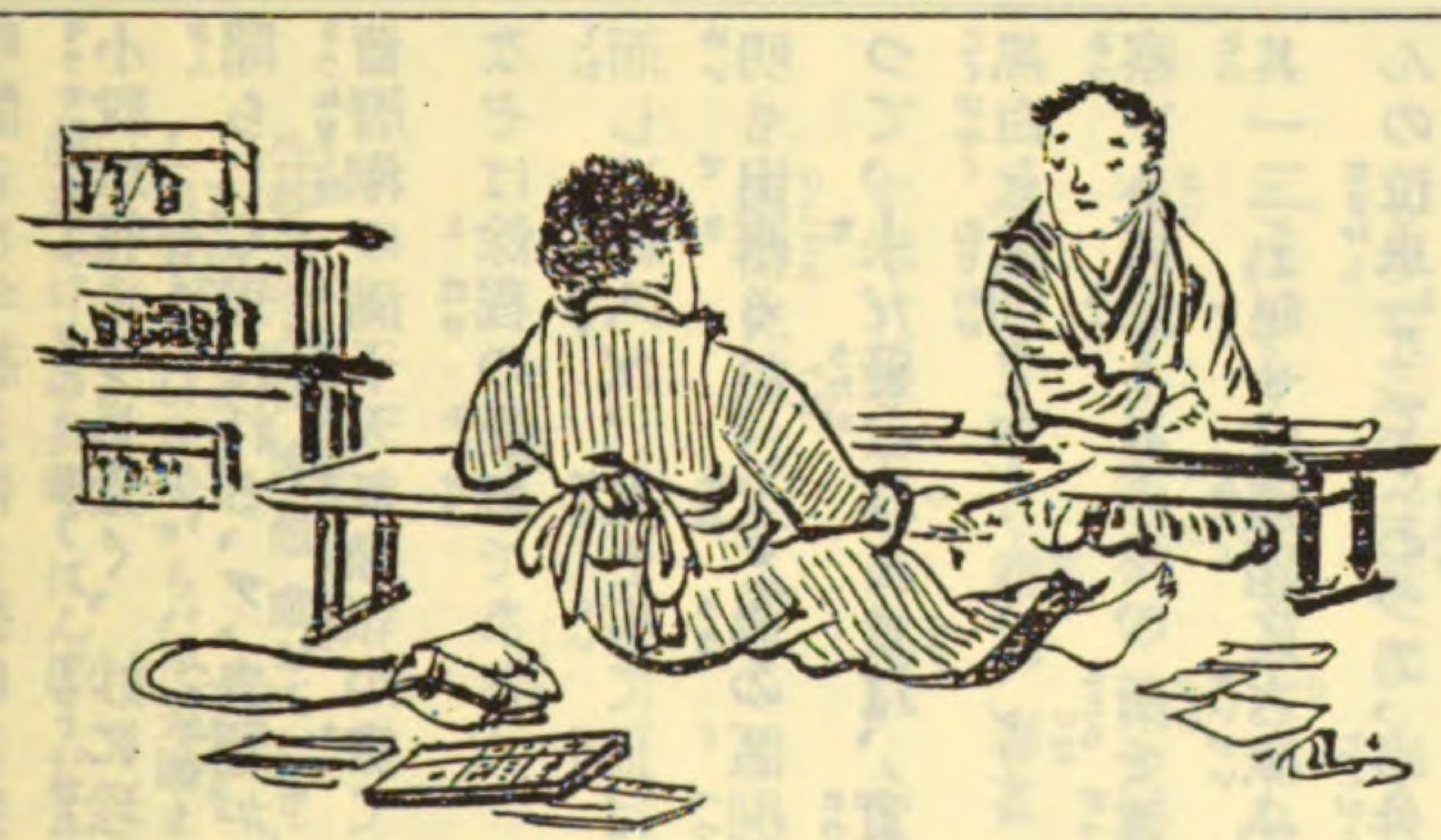
『君そりやあ駄目だ、左樣事あ不良さ』。

『何故、何故、駄目だい』。

『何故つて君』。

『何が何故、何故つて何が、何を云やがるんでイ』。

是は〳〵飛だ新聞記者だ、早逸茂は泣聲である、嘘尾はグッと肩を高くし、今や落んとせし下り藤然たる鼻汁を吸込んとして能はず、筒袖で無雜作に横撫をして、『君』と一聲高く叫んだ、スルト、下座敷から『喧嘩をしては不良せんよ』と、師匠の聲が聽えた。



『君だ、君だ、君が彼樣事を云たからだ。』

『ウ、ン君さ君だよ、君だよ、君だよ。』

『だつて君が、鼻尾君（名は垂）の事を書つて云たからさ、可愛想だあテ。』

『宜いぢやないか書たつて、君だつて奈久名い、子さんの事を書たぢやないか。』

『だけれど鼻尾君の事あ可愛想だ。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

流石今度は論判も小聲である、所へ、下座敷から昇て來たのは女座の花野よう子、年は十六位で、時には師匠の代理を勤める、先玆での姉樣株だ。

『逸茂さんも、噓尾さんも、宜い加減にして、御歸んなさいよ、新聞ならまた明日、チツ、今の樣に喧嘩なんかすると冝ないから、チツ、明日なさい、チツ、其代り明日妾が畫を書てあげましよう、ダカラ今日は早く歸つて、ソラ探訪をなさいな。』

と其邊等散布て居る紙屑、いや原稿を始末してやる、逸茂噓尾の兩先生は繪を書てやるといはれ、明日又附錄だと勇み、『ソラ探訪をなさい』と云はれたのが、何だか斯樣非常に新聞記者らしく聽えたので、急にゑらくなつて堪らず、小さい肩を聳かし、得々の色は溢るる計りだ、

『逸茂君歸ろふ。』『ア、歸ろふ。』『君探訪するんだよ。』

『ア、僕ぁ種々事件聽て來るんだ。』『僕だつて。』

革鞄を肩から斜に掛け、お手本と算盤を抱へて、

『ようちやん、あばよ。』

と逸茂は云た噓尾は、

『失敬』

と眞面目にやつて、何だ己の立派さを觀て呉れといはぬ計りで下て行た、下座敷で『先生左樣なら』と聽えて、格子戸が明くと、二階からよう子さんは駈下て、オホヽヽヽと笑ひ倒て袖を口に宛てた儘、突然眞面目になつて、

『先生可笑んですよ、』

とは未だ無邪氣な所がある。

逸茂噓尾の兩先生は、格子を出ると、『失敬』『失敬』と別辭を告た。

偖て逸茂先生は、何か一番面白くつて可笑つて堪らない事を探訪てやろふと考へながら横町の角へ來ると、種々の廣告が土藏の壁に張てある。

風流、村雨、京橋銀坐御菓子舗古月、
『何だろう風といふ字に流る風流—村—雨、何だろう、京橋銀坐御菓子——何だろう——古い——月——月——解らないや、』
と次を觀ると
脚氣根切灸
『ヤァ此奴も讀めないや、達磨樣が畫てあらァ、何だろうなァ、』
と到底廣告は讀めないと斷念して歩き出したが、偖殘念だ、村雨風流る、何だろうと考へながら來ると、脊後から急いで來て袖を摺て通た女の子がある、觀ると女座の五番に居る奈久名いゝ子で、双子關東縞の風呂敷へ包むだ物を下て、せつせと早足進めた、甘いぞ〳〵明日悪口を書てやらうと考が浮んがから堪らない忽然一個の小探訪となつて、革鞄を左手に抱へ右の手に算盤とお手本を持て大股に足を抜き時々首を縮めて舌を出し、天水桶の蔭へ隱隱れたり、路次行く人の脊後へ隱れて小走りに二三間駈出して觀たり、詰り自分から苦心の躰を演じて、獨り樂む樣子だ○デ探訪の結果、得た所の事實は、風呂敷の中は八里半である事、い、子が途中一本を横奪て、其四半分を酒屋の白犬に與へた事、白犬に後強請をされて泣顏をした時、鼻から出した提灯が破裂して、前垂の横撫をやつたのを、買物に出たお袋に目付て、甘からぬ叱言を喰た事、此三ッであつたが實に横撫事件は號外の價値ある物と、逸茂は勇んだ、
偖て此學校類似の私立校は、淺草公園の傍で、逸茂は公園を通り抜けて、自宅へ歸るのが例であつた、其故玉乘も、輕業も、生人形も、眼に慣れて、別段注目を惹くに足らぬと觀え、殊には精神に、横撫事件の勇があるため、ズン〳〵側目も觸らず歩て來ると、池の上へ突出した、梅園といふ水茶屋から、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『オヤ樂ちやん寄て御居でな御馳走があるよ』
『ヤァおばさん居たの御馳走ッて何お鮨だらう』
『あゝ此方へお入り』
逸茂は默々の中に承諾の意を顯し、算盤と手本を床机の上へ投出し、革鞄は掛けた儘坐敷へ昂つた、スルと梅園のおばさんは、刻みずるめ、おぼろ海苔卷、此三ツを小皿へ載せて、サァと計り、逸茂に與へた、
『樂ちやん、試驗は何時だい、』
『最早結了だ、僕ァ一番』
『オヤ一番、剛義だねェ、おッ母さんから、御賞品を貰たろう、』
『ウヽン、』
『何故、……貰はないのかい、』
『ア、、』『ヘエー、先日一番になると、貰うッて云たぢやないか、』
『だつて僕ァ』『一番だらう』『一番は一番だけれど……』『一番だけれど』『一番だけれど……』『何だァ』
『だけれど……何だァ……ッて何したの』
『最下等だァ』『オヤッ』
逸茂は、有繋に面目なく、深く問ひ詰らるゝ毎に、猿の如く赤くなりしが、最下等だと答へる時、食べかけの海苔卷を、無宙でグッと呑込めば、咽喉に詰りて、眼を白黒、折柄對家の觀物小屋で、『眼中の容躰に、お眼止められて御覽じませ』
おばさんは、茶釜の煽るも捨て、座敷へ駈上り、
『樂ちやん、何したんだねェ』
と、可忌ッと云ふ程、脊を一ッ、逸茂はハッと思ふと同時、海苔卷が咽喉からポンと飛出せば、一粒四錢が涙を、惜氣なく、四五圓滾し、
『おばさん、苦しかつたぜ』
と飛出た海苔卷を、又掴むで、『此所逆戻りの躰でムい』だ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其處で逸茂は、『おばさん又來るよ』と、例の手本と、革鞄を抱へて、表へ出ると、

『オヤ最早歸るの、未だ宜ぢやないか、左樣、そんなら家へ歸たら、先日は澤庵を澤山に有難ッて、宜いかへ、忘れちやア不可よ、』

逸茂は、ア、ア、と、無暗に點頭き、駈出すと、寐て居た犬の横腹を踏み付る、

『キヤン〳〵、キヤン、』

『オヤ、此奴失敬な、吠るなんて生意氣だぞ、馬鹿、畜生、頓間』

犬はわんの事だ面白くも無いと横腹を嘗て居る、昔から好く云ふ奴だが、鳥差が雀を覗ふと、犬が其辨當を窺ふの格で、此逸茂の後を尾る奴がある、夫は即ち、例の編輯長兼探訪先生の、嘘尾吐藏その人、いや其小僧だ、

『甘いぞ〳〵、逸茂め、海苔卷を、咽喉につかへさせて、ア、、、、、、犬を踏付ヤアがつた、、、、、、、此奴一番書て遣るぞ、』

逸茂は唯或酒屋の店を覗くと、早や四時十五分前だ、すると、二三間前の横町から、兵隊飴屋に依て傳授された、進軍喇叭が聽えると同時、一小隊の日本兵が、突如として顯はれた、

『ヤッ逸茂、未だ歸らないんか』

とは駄菓子屋仕込の竹刀を佩た、福島中佐が第一に發した詞だ、

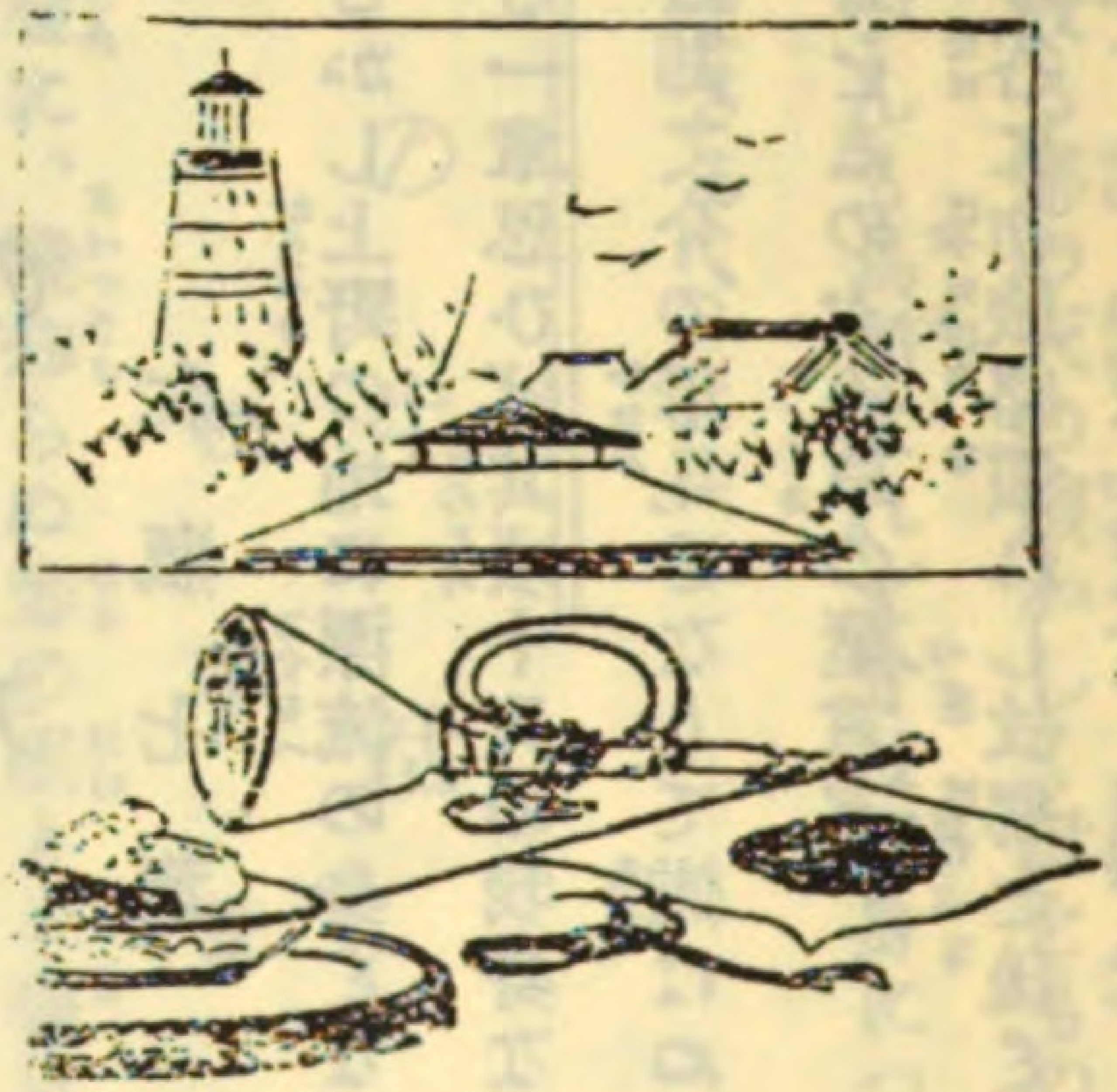
『何處か行たんだろう』

とは第二に發された詞で、即ち、錦繪の勳章を懸た、野津大將である、

逸茂は是に答へず、『君、戰でつこするのか、僕今家へ行て、直ぐ來るから、いれて呉れ玉いな』と云た、スルト福島先生

『君、君ア何だろう、子供新聞の記者だろう、ダカラ従

軍記者に成り玉い、子ッ、〳〵』
と勸めながら、『己は剛義な事を知てるだろう』と肩を聳した、實以て剛義なのである、他に從軍記者てふ事を知てる者、否解する者すら無いのだものを。
逸茂は、首の振分を仕て、
『可忌だァ、僕ァ可忌だァ』『何故ッ』
『だつて馬ごつこ仕る時だつて、帶に繩ァ付けて駈出すんだもの、滊車なんか可忌な事た』
『戰爭に滊車なんかありやァしないぜ、可笑や、滊車なんか』
福島中佐、憤然として欄を叩き、
『馬鹿ッ、君たちァ知らないんだ子、從軍記者ッて子、



新聞記者が子、戰爭の時兵隊と一緒に行て子、戰爭の樣子を記て新聞に掲載ですよ、へェ左樣ですから子、僕ァ何だ、兄樣が新聞記者だから、好く知てらァ』
と説の確實なる事を語尾に依て確めた、が『其確め』が、又他の兵卒の、辯護となつて、
『君ァ、兄さんが新聞記者だから、知てるんだ』
と他の兵卒が、『馬鹿と云はれたを取消すと同時、其處で其職に就かん事を約した、
此前から尾行て來た噓尾は、逸茂が軍隊に從軍するを觀て、『僕も』と思はぬでは無つたが、野津大將と前日、意外の衝突を起した結果、打合を演たので、列内に加はるは至難からんと、指を啣へて、歸宅の途へ退去た。
所で、軍隊は、野津大將の、『君觀音樣の方へ行ふ』の一號令の下に、どう〳〵たる進軍は始められた、スルト例の逸茂は、玆ぞと草鞄から表紙に『山水天狗』『へへの〵もへじ』『小供新聞』なぞ、落書のある帳面を出し

て、忽ち艶いや鉛筆を振つた。其文に曰く。
此日天氣晴朗にして風師驚かず余學校の歸途横町より顯れし兵隊に會し共に觀音樣の方へ行んと誘引せらる余此處に於てか一緒に行ふと約し瓢を携へ杖を曳き燒芋屋のかどを發す（完）

故郷の天

仁瓶七葉

數ふれば早や六年のむかし上野の地に漂流の身となりける折にものしたる一章思ひば其頃十八の我身なまじいなる筆の幼氣は却て今の形見となりて揃はぬ節のおかしければ疇昔を志のぶの草の葉言ぞ
思ひ回せば去年の春涙の谷に初旅路慣れし故郷を後とに見て慈愛や深き父と母最とゞ可愛の弟妹や交り深き朋友と花の下にて手を別ち望みの道を一とすじに西も東も白ら雲の遠き山路を蹈み越へつ刀水の畔りに筇を止め寄せ來る狂瀾の最とあらき浮世の海に舟出して楫は折らるゝ暴風怒濤行路をとむる暗礁寸時も絕へぬ身の苦辛、榮譽を己のが目的にて進めど行けど行く先は深き狹霧に罩められて舵を向けなんすべをなみ何日か吾身の望むなるエデンの岸に着くなるや今は進まん氣も失せて榮譽の望みも水の泡沫浮世の波に漂ひて方向も分かぬ蘆の舟思ひば敢果なき吾身なり」
月影白ろき秋の夜や雲間を渡る雁が音も故郷の天に歸るぞと思へばいとゞ懷かしく木枯し寒むき冬の日に越路の山に積む雪の日に日に白ろくなり行けば故郷のことぞ思はるゝ吾父母の老ひの身に無ぞや寒むくやおわんらん吾弟妹は稚な身に無ぞこそ寒むくあるならめ。
光りのどけき春の日に見渡す山もうすけぶり柳の糸のあさみどり樹々の梢に咲く花の春の錦を見るときは吾れ故郷に在りし折り稚なきときに朋友と爪打ちあげて戯れし野山のことや兄弟と糸うち垂れて遊びたる背戸

の小川も目に浮びそゝろ涙に呉れ竹の吾目に觸るゝ物事は皆な憂きことのたねなれど心の中を憐みて慰めくるゝものもなき寄邊渚の捨小舟。千年もあまり前きつころ唐土の濱に仲麿が故る郷の天の懷かしく歌をものせしためしをば引き較べんも烏滸なれど今は我身につまさるゝ今は此身につまさるゝ

山家の生活

松琴生

庭の竹藪に囀づる雀の聲に、曉知らぬ春の眠りも覺めて、臥床を出づれば、母は已に起き出でゝ炊事の支度なしつゝあり、井戸端に行き清水汲み上げて、盥嗽を終り、和かき朝風に、袂吹かせつゝ前栽を行けば水田一つ隔てたる向ふの森に、鶯の聲も聞え、桓根に咲ける菫の露を帶びたるもゆかしく、霞そへたる淺間のけむりも長閑かなり、やがて父も起き妹も起き年老ひたる祖母も起き出でぬ、父は庭の隅に取散らされたる藁を束ね、祖母は爐邊に坐りて柴折りくべ母が炊事の助けをなし、妹は室内の掃除庭の枯柴など取片付くるうちに、飽く迄眠りを貪りし弟殿も父の大喝に驚き覺めて、睡眼こすりながら起き出で、昨日殘せし林檎の接木を爲さんとて鎌と鋸とを携へて裏の畠に行きぬ「朝飯なり」と母の呼ぶに家に戻り、打そろふて朝の祈りを捧げ、爐邊を圍みて膳に向ひば、母は釜の傍に坐して飯を盛り、妹は汁などとゝのへ、祖母は榾柴折りくべて湯を沸しつゝあり、「今日の天氣は如何に」など打語らへつゝ、菜汁と大根漬に麥飯三椀傾むけ了れば、今日の業務を向くれと語らへつゝ父と余とは麥畠を耕す可く、十町餘り離れたる野に行く可く、弟は車を引きて淺間の麓に行き柴土を切りて田に運ぶべく、祖母は留守居を兼ねて麥をひくべく、妹は父が野良衣の破損を繕ふべく、母は隣家に機織に行くべく定まり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぬ。
弟は紺の野良衣に半股引を穿ち、ふちの破れたる麥藁帽子をかむりて、早や荷車がタガタと引出すに、父も余も各其業に付くべく急ぎぬ、父はあちこち繕いたる袷の裾を折りて帶に挾み、股引はゞきを穿ちて垢きたる手拭を頰かむりにし、余は袖など摺り切れたる洋服の上衣に紺の股引を穿ち麥藁帽をかむりて、腰のあたり紐にてしめ付けたるに其樣の可笑しげなりとて、祖母も妹もいたく笑ひ興しぬ、父は鋤を肩げ余は草把と鍬とを携へ村端れより松樹茂れる鎭守の森を過ぎて、林端の坂を下り向ふの岡へと上りゆけば菫たんぽゝ路の邊に盛りをきそへて、青々たる麥畠のそよ吹く風に靡き、所々菜の花の黄色なるに蝶の戯むるゝも見え松のきげみに山櫻のほの見ゆるも面白し。
やがて畠地に行き着けば父は鋤もて空地を耕やし、余は麥畠の草を取りて鍬にて土を穿ち寄せぬ、疲るれは畔邊に出でゝ煙草くゆらし、父と樣々の物語りしつゝ凡そ十分計りも休みては又も業をはげみぬ、耕しては休み休みては耕しゆくに日はいつしか高く上りて腹の中自ら空しきを告ぐる頃、妹の山櫻の枝など折り携へて未だふしなれぬ讃美歌可笑しく歌へつ中食携へ來るに、畠續きなる森影に行きて、父は松の根元に腰打掛け、余は柴草の上に踞して包を開けば、隣家より貰ひたりとて、草餅の大きやかなるに小豆のあん入れたるがあり、父一つ余れ一つ遂に殘りなくなれば妹は空包携へ路のべの胡蝶逐ひつゝ歸りゆくに又もおのがじゝ先きの業を續けぬ、やがて聞ゆる上り列車の汽笛に「はや晝となりぬいざ歸らん」との父の言葉の打連れて家に歸れば妹は笑ましげに門邊に迎へて「迎ひに行かん所なり」など語りぬ、母も弟もはや歸り居て、弟は歸路に車を覆して小指少し傷けたりとて母に小切れにて包みもらひ居りぬ、晝飯には大根漬の茶漬に味

噌仕入用の甘酒など幾椀か傾け盡し、志ばし爐邊に横になりて息ひ居ば折しも新聞の配達し來るに、寢ころびたるまゝ余は先づ小說の欄など讀に父は附錄の相場など眺め弟は余か左側によりそへて雜報の面白き題目など探しつゝあり、かくて一時間許りも休みて各午前の業を續ぐべく立出でぬ、出立がたに母は父にむかへて「夕食は何にすべきや」と問へば「何にても」と父の答ふるに母は余が顏ながめて「汝は又蕎麥が好きか」など云へつゝ笑ひぬ、午後も亦午前の如くはげみて黃昏告ぐる山寺の鐘に鴉の鎭守の森に急ぐ頃家に歸ぬ、農具は小屋に納め背戶の小川にて足を濯き室に上れば影暗き燈火室内を照して夕飯の支度とゝのへ居りぬ、蕎麥もあり、麥飯もあり、葱の味噌汁もありき、夕食後祖母は早くも臥床に入り、余は晝の新聞など繰り返すに、隣家にて「風呂の出來たり」と呼べば父母と妹とは入浴にとて出去りぬ、弟ははやも爐邊に倒れて鼾の聲のみ高し、やがて皆立歸りたるに暮れの祈りを捧げて臥床に入れば、小田の蛙の聲のみ聞えていつしか夢なき熟睡に入りぬ。

男子らしき服從、男子らしき獨立、男子らしき信任、男子らしき自信、此四つのものは一見反對の觀あるも實は相伴ふものぞかし

（ウチヅウチルス）

談叢

天才と習練（二人の技術者）

松原乾坤

猫眼の鑑定は人眼よりも確かなり

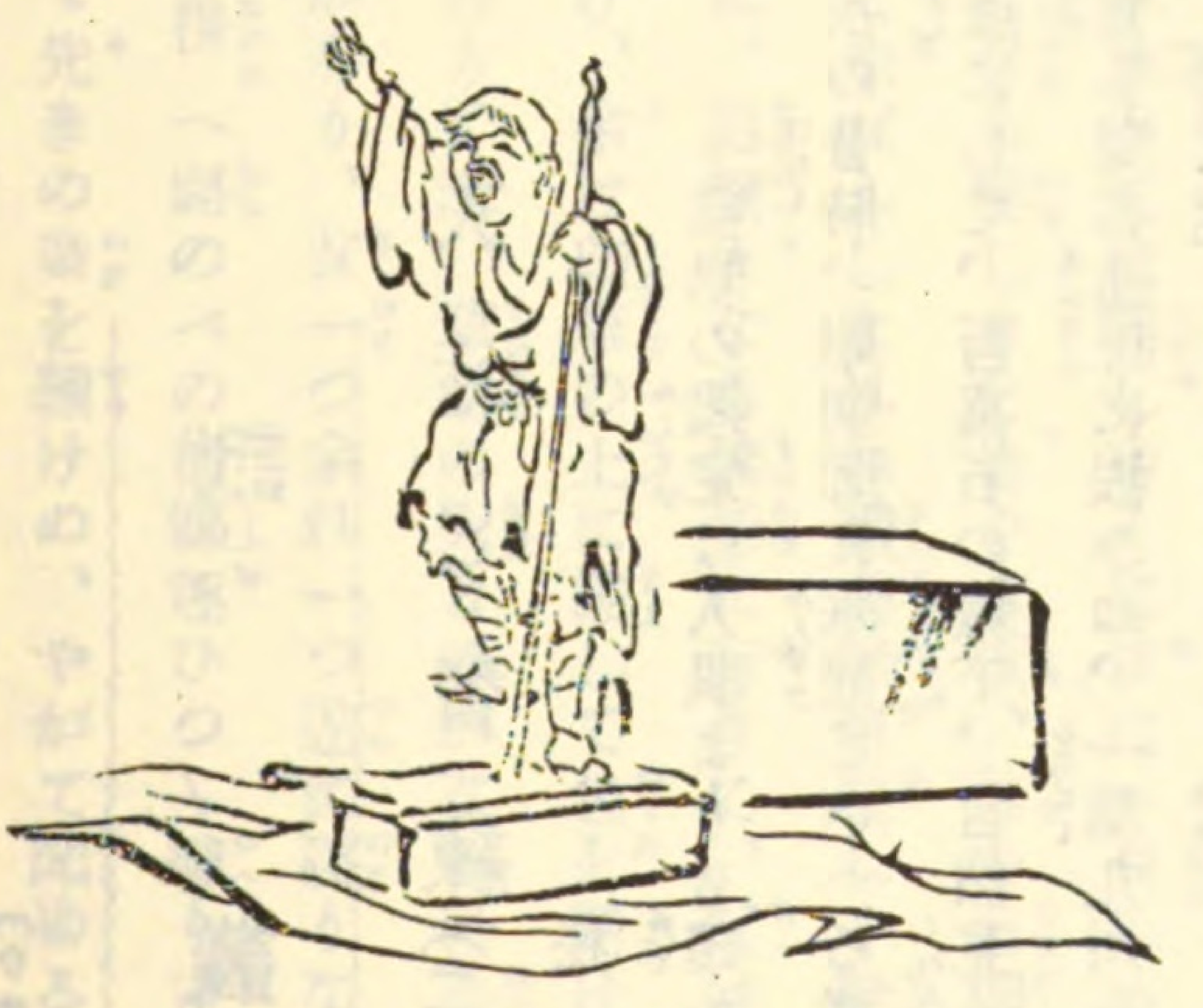
寛永の昔時、彫刻師に眠龍といへる者あり。加賀金澤の產にして、百萬石の城下、自然寛濶の氣象を稟けて育ち聲名遠近に振ひぬ、一歲九州へ志して越前敦賀より買船に乘込み、北海の荒濤を破ッて、船路遙かに長州赤間の關へと向ひける、折柄烈しき暴風に出遭

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ひ、沖中遠く檣を折り舵を挫きて船進退を失ひ海中に飄蕩すること數日、雲か霞か島か陸か何處とも知らざるまゝに山を見かけて漕ぎつけやうやくにして只ある港に入りぬ。

港は山を負ひて人家三百餘り、斗出せる半島の突角拳の如く峙ちて深き淵を爲し、灣曲せる半島の一端より檣頭林の如くに連なる賈船の輻湊、一見賑はしげなる船付なりしが、名に呼ぶ三保の關とて、北前船の折節風待するところ、出雲の國の出鼻とこそは知られたり。

難船せし人々一同茲へ漂泊して詮方なきまゝに日を送ると若干、いつしか眠龍が腕に一廉の技術を蓄へ居るよし評判となりて所在の豪客なんどが徒然を慰めんとて訪ね來り、置物、印材、根付、其外種々の好みを齎らして彫刻を請ふもの多く、殊に眠龍の技は動物を造るに妙を得て一個の鼠、一個の猫、一個の蛙、一個の蟬の作る所氣韻生動して其技の神に入るは勿論其大なるは犢、馬、鶴、鷹、の如きより小なるは蟹、鰕、蜘蛛、蜂、の如きに至るまで皆其實物の大小形骸に準じて彫刻を爲し形物自然の色彩に隨つて其材を撰ぶ事殆ど天稟に出づ、茲に於て眠龍の名聲は忽ち高く朞月ならずして妙匠の評判國中へ傳はるに至りぬ。



時に雲州侯松平出羽の守、城下に在り、我が領内に奇特の工匠の漂泊せるよしほのかに聞玉ひて、其れ珍ら

しき奴なり、急ぎ其の者を召し伴れて参れとの御諚意に近習畏まりて港へ下り領主の旨を傳へしかば眠龍は直ちに城下を指して上りぬ。

眠龍人と成ッて一種の氣骨あり、性恬淡無欲にして、衣服身邊の具少しも顧るところなく一簞の食、一瓢の飲、蝸盧三尺の室、肘を曲げて樂を其間に求む、洒落圓脱所謂技術に遊ぶ底の人品、胸中自から高尙の氣禀を蓄ふ、一日大守其技を見んとして方三寸ばかりの象牙の印材を授け給ひ、是れにて其方の好むところ何なりと作りて見せよとありければ、眠龍一夜案を立て、起工三日にして鐫工し、直ちに伺候して賢覽に供しぬ。聲名高き匠人の如何なる技こそ出來しつらんと心待ちせし大守は、取る手遲しと打見給ふに斯は抑も如何に三寸立方の印材は依然たる印材にして寸分剞劂を加へず、些の刀痕だになし、眠龍が持ち歸ッて三日三夜技を施したるところ更らに見當らず大守も近習も怪訝なる面色にて如何に眠龍其方が得意の技藝はと宣給へば、眠龍笑ひながら受取ッて御覽あるべしとて兩つの指頭もて捻ねり廻せば、奇態なり、方形の印材は形の如き箱にてありけるよ蓋を明くれば内より顯はるゝ蟆蝦仙人の彫像、脚を地に跱てゝ手を天に指したる入神一作物蓋の裏面に米粒ほどの蝦蟆を刻みて更らに意匠の妙を極めたるものなり、一同是れはと呆るゝばかり大守の感賞斜ならず、厚く賞を與へて其技術に酬ひ併せて生涯を召し抱へんとの思召あらんとす、偶々竹齋なるものあり。同じく彫刻の技を以て深く侯の愛顧を得たり、竹齋も亦能技の美術家にしてよく動物を刻む屋形に出入すること既に久しく近習の間に昵懇淺からずして、面々の贔負する所あるより新たに眠龍の愛顧を得る竹齋の上座に位するを欲せず、眠龍は元より一種の隱逸者、敢て大守の寵遇を倖するものにあらずと雖も、既に贔負の人あッて扶祿入となる上は又敢て

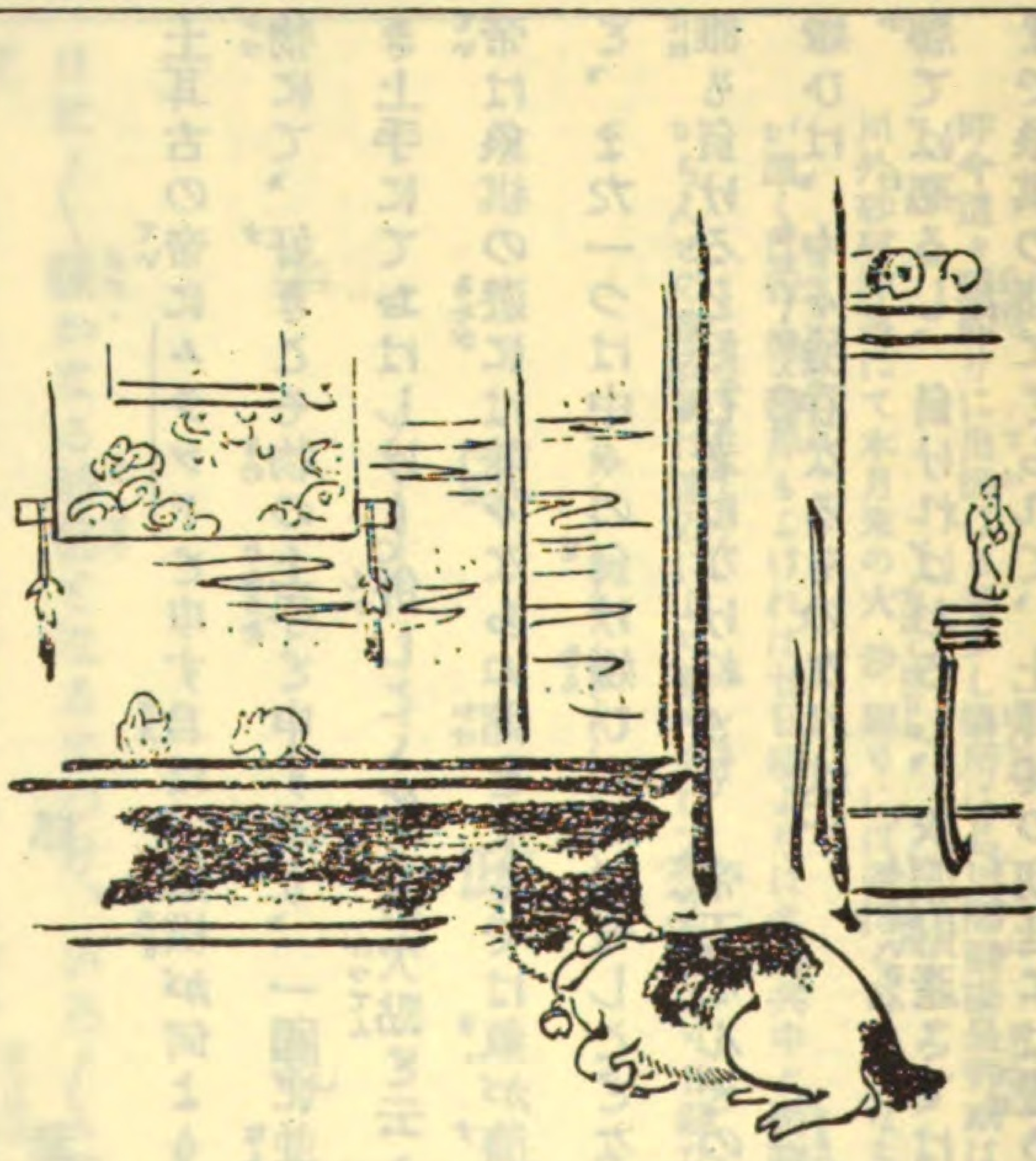
竹齋の下流に座するを潔よしとせず勿論席の上下は技の巧拙に據ッて定まるもの両個の技術家、孰れか巧手にして孰れが拙なる、力士劍客の頭取ならば相撲、果仕合に依ッて勝負を判ずるも、技術の鑑定には多く贔負の眼ありて凡眼を以て審査し難きところあり、竹齋は密なれども神韻に於て欠くる處あり、眠龍は氣骨凡ならざれども多くは麁物なり。何れを巧、何れを拙とも言ひ難し何を以て其席次を分たんかと近習打寄りて評議取り〳〵盡くるところなし。時に内閣に出入して茶事を與かる翫球といへるものあり、殿中稀れなる利發者にして奇警を以て屢々人目を驚かす、偶々近習に評議のあるを聞くや忽ち一計を案出し、竹齋眠龍共に動物を作るこそ奇妙なれ、彼等をして各々一個の鼠を作らせ、出來上りたる上にて猫を呼び、是れを判ぜしむるに如かずといへば一座横手を拍つて此の智惠如何にも妙なりと早速兩人へ此の趣を傳へて十日間の猶豫を與へたり。

技術製作の爲めに十日の猶豫を貰ひたる双方の彫刻者は始めより仕事の流儀を異にしたり、竹齋は玆一生一度の晴れの場面と心得へて刻々怠らず、まづ活物の鼠を捕へ來ッて是を鐵網の中に囚れ、眼を定めて凝眸熟視、細かに其骨格姿形、跳梁飛躍の實相を極めて刀を下し、材を撰むこと幾十種、鐵刀樹の尤も灰色なる所を精撰して刻み始めぬ、一日一眼を作り、二日一鼻を彫し、三日、四日にして稍く頭部を作り手足を作り、尾を作り、七日七夜打ち徹し僅かに一體形造り其れより緻密なる仕あげを爲すとて殆んど十日を一匹の動物に費し了りぬ。然るに眠龍の爲す處を見れば毎日遊び暮して念頭に期日のなきが如く一日は江邊に釣を垂れて終日一尾を得ることなく、家に歸つては酒を飮み、碁を打ち、若しくは一日欄杆に凭ッて、蟲の這ふを終日眺め暮らすなど見戯に均しき遊戯に日を消して殆ん

ど約束のあるを知らざるもの丶如し、期日既に近づきて明日はいよ〳〵其の日といふ時近習の一人蹊徑見んとて來り訪へば竹齋の鼠は既に悉皆出來あがりて其美くしき事言ふばかりなく是れならば猫も見擬ふほどの品なり、眠龍の方如何といへば九日つゞけて遊び暮したれば是れから始めて明日の間に合すべしとの返答、樣子見に來たる近習も彼れが無頓に一驚したる程なりき。

其　下

今日は珍らしき猫の鑑定、眠龍竹齋兩名が技の能否を班つべき日なりとて奥御殿には近習の外に幾多の家來打寄りて列座をなし、兩人の出仕いまか〳〵と待つ間程なく伺候せし竹齋、眠龍銘々の丹精に成りたる作物を携へ御側の役人に渡して退りぬ打見し處、竹齋の技術頗る精巧にして實物とも擬ふばかり眠龍の方は痛く劣りて素人の眼にさへ瞭らかに其の拙作たるを判じ得るも巧拙の段は暫らく鑑定者の意に任すべければ玆にて言ふ勿と二個左右へ並べて床の上に置き、やがて猫を呼び來らしめぬ。



太守は上座に居まし、近習數十人左右に控へて列座を爲し、眠龍竹齋の兩名遙か下りて下座に伺候す、此時

一人の侍婢の猫を攜へて來るあり、太守手づから床板を叩きて此處ぞと呼び玉へば、猫は飛び下りて一散に走り行きキロ／＼と兩個の鼠を右左りに見廻し何方へ飛びつかんと躊躇する間も一瞬時、眠龍の方へ飛び懸りたるこそ不思議なれコ、ナ畜生奴と竹齋贔負の人々は意外に打たるゝ此時早く猫は竹齋の造りたる鼠に向ひつ前脚あげてウ、と一と聲、其りやこそと一同の笑壺に入るとき如何にしけん足にて蹴落し其儘見向きもせず猫は再び眠龍の作りたる惡作の方を目がけて跳りつき、口に啣へて一目散に走り出し床の下へと迯げ亡せたり一座呆れて意外の顏色コハ狼藉物めと近習の一人慌てゝ跡を逐ひかけ、庭掃男を呼びつどへて普ねく椽の下を穿鑿せしめたるに椽端しの隅の方にてムチャ／＼と口動かして食ひゝつありける猫を曳づり出してよく／＼見れば、斯は什麼いかに、鰹魚節にて刻みたるものにてありけり。

命賭け（上）

楓葉

土耳古の帝にムラッドと申す君は、象棋が何よりの好物にて、好きこそ物の上手と申す通り、一國に並びなき上手にておはしけり。併しこゝに一の欠點と云ふは、帝は象棋の遊には並々ならぬ賭をなさでは氣が濟まぬと、また一つは中々の負け嫌ひにおはせしことなり。誰も負けるを好む者はなけれども、帝王なんどの負け嫌ひは、中々險呑なるものなれば。

勝てば惡るし、負ければわるし、衣服財產さては生命まで象棋の賭にとられて、土耳其の朝廷には皺める眉ぞ多かりける。されば帝の臣下は一人として何時か帝の御相手仰付られはすまじきやと、日々戰々兢々として暮せる中にも、宰相こそは常に帝の御側近く伺候す

ることゝて此苦を受けること多く、然れば此頃の宰相は三日にあげず更代するが常なりき。

斯る内に宰相何某なる者あり。其人となり大膽にして賭博やうの事を好めば、常に帝の御相手して暮す程に、或は勝ち或は負け、到頭一物も有たぬ迄になりてけり。

或日帝は象棋盤を前にひかへて、「卿が今度の賭は何ぢや」と仰あれば、

流石不敵の宰相も頭かく／＼「實は陛下の御手練の程の恐しきばかり御巧にあらせらるゝによつて、今は着用致し居りまする此衣裳まで實は差上げたものになつて居まして、たゞ身一とつ娘一人もつて居まする」

「よし／＼、其れなら箇樣致さう。卿は其女を賭け物に致せ。朕は後宮の美女を選取りにして、それに金一萬兩を遣はさう。」

唯一人の素女、象棋の賭け物とは情なき限と思ひしが、さりとて一言云ひ出しては中々用捨ある可き君ならぬこと疾くより承知なれば、詮方なく御相手を致すに、唯一戰に見事敗北をとりたりける。

鱚釣の好時節

昨今追々鱚釣りに出掛ける者多し場所は品川澪臺場最寄或は中川外砂村沖等にて本月末の大汐廻りには新澪も可なりならんが遠くは行徳沿岸もよければ廿日頃よりは名所共中々獲物多からんさの事舩賃は遠近により乘り合ひ一名十三錢より廿錢なり

家政

牛乳

K・K

日に／＼暖かなる時節となるにつけ、いろ／＼の疾病起り其病根も一にして足らざる事なるが、牛乳なども間々其媒介となる事あり。是は牛乳にいろ／＼の臭氣を吸收する性あるを氣つかざるによる事多くして、開

放したる器に乳を入れ樟腦などの如き臭強きものに接近し置くときは直に其臭氣を吸收するものなれば、揮發物の傍に放置し又病室に置きたるものを飲用すべからず、必らず密栓を備ふる器に貯へざれば危險なり。』又乳を貯ふるに手輕き仕方あり。則食鹽を少し加えて貯ふるときは數日間甘味を落すことなく、腐敗を防ぐこと妙なり。邊鄙の地に住み日々求め難きときは至りて便利なる法なり。

野菜の中

には諸病に特効あるものあり。其一二を示さん

一ちそ及胡爪は身躰の組織を清涼にす。

一ねぎ、にんにく、にら、かんらん等は唾液胃液を増し消化を助け筋骨を丈夫ならしむ。

一葱の肉湯は消化器の衰弱を醫す。

一珠葱は利尿藥にて白葱は不眠病の藥となる

一蓬は種々の効能ある草にて、大に身躰の健康上有益なり。或實驗者の話に蓬の若葉を摘みて乾干し、黒くなるまで抱炙し、通常の茶の如くして用ふれば、香味よく躰温を増すこと妙なり。

一芹はリヨウマチス及神經の藥となる。

一あかなすは肝臓の藥なり

のぼせにつき

時節がら逆性の人にあらざるも鼻血の出づる事間々あるものなるが、これを止むるには綿撒糸を焼明礬の水に浸し鼻穴へつめ、冷水又は氷にて頭と足のうらを冷すべし。

口中クワツ〳〵とやけるは誠に不快なるものなるが、生胡麻一匁を煎じてこれを含み、度々うがひするとき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は口中の熱は次第に去るものなり。

いろ〳〵の料理

先づ何魚にても宜しきものを蒸して温飩粉を卵にて解かしたるものにてころもをきせ、牛酪或は製油と少しはかりの葱を細かに切りて炙り、鳶色になりたる頃醤油胡椒煮出し柚の汁等を混じ、さきの魚を入れのろ火にて煮つめ、温かなる内に食すべし。

先づ宜しき山芋をおろして擂鉢にて充分よく擂り豫め鯛の身をよく擂りおきてこれに交ぜ、煮出の露にてとろゝを作る、葱、海苔、唐がらし等すき〳〵の藥味を用ゆ

牛肉を切り庖丁の背にて能く〳〵叩き、燒鍋にバタ或は製油を少しとかして牛肉鹽胡椒葱などを入れ、茶色になりたる頃牛肉葱等をすくひあげ、あとの汁へ温飩粉を少し入れ、煮えたるとき鹽と水を少し加え煮立ちたる後其汁を漉しさめぬ内に前の肉にかけ膳に供す。

昨今のおかづ

◎金かんの甘煮　この節は金柑の好時節なり、大抵の料理屋などにて口取のとり合せ又は燒物の取り合せに出す、甘口の人の意に適ふ、さて此製法は先づ程よき金柑を針にて數個所を突き、湯を煮え立て時々水をさしてなから茹でゝ水に浸し酸氣のなくなるを度とし、砂糖に味淋を加へ、少し鹽を入れて煮上ぐれば皮ごと柔かに味がつくなり。

◎簡易茶碗むし　茶碗むしを正式に製せんには、始め清汁をこさへて鹽梅をし、之を煮えたゝせて片口にうつし、冷して後、鷄卵をこはして其中に投じ、能々掻き廻はして盛るべき茶碗へ種物を投れて、鷄卵を溶か

せし清汁を注ぎ茶碗に蓋をして甑の内にて蒸すが本當なれど、釜の中に簀を置きて蒸すは簡易の仕方なり、これからの種物は鰻、あなご、鱸などの蒲焼か鱧の照焼（味啉醬油のつけやき）に木くらげ、銀杏、長芋、じゆんさいの類を取合はすべし、但し是等の種物は蒸さぬ前、味をつけるものは味をつけ、湯がくものはゆがくべし。

精進ものにて製せんには生ゆばを擂鉢にて能く摺り、山の芋を生のまゝ皮を剝ぎ山葵おろしにて卸し、兩品をよく摺りまぜて極上の葛を溶きすこしづゝ入れつゝ能く摺りまぜ、昆布煮汁を鹽梅して其の汁にて摺り延ばすべし、種物は此節ならば木くらげ、くはゐ、長芋、三ッ葉などを取り合せ吸口にきの芽又は實山椒を用ゆるも面白し、此外銀杏又は栗にてしたてる法もあるなり。

◎蕗と蕨のかこひ　此頃は蕗と蕨の眞盛りなるが、長く之を保存せんには、蕗は生には皮を剝き去り、葉ばかりを摺鉢に入れ、鹽にてもみ、青汁を取り蕗の肉は鹽にて漬け、右の青汁を入れて壓石を置く時は、入用のときいつでも、鹽出しゝて煮物に入るれば、少しも生の蕗にて異ることなし、又蕨は鹽に灰をまぜ、蕨を幾重にも重ねて桶に漬け、壓石をなし、之を使用する四五日前に取り出し、水につけおき熱湯をかけし灰をあらひ落して食用となす、鹽をからくし置かば兩三年は氣遣なし。

◎比目魚「親にらむ比目魚を蹈まん汐干狩」の頃より今日此頃は此魚の好時節なり、旨煮、さしみは誰も知る所なるが、葛煮の仕方を記せば先づ三枚に卸し、味淋と醬油にて煮あげ、肉を引き上げ、其煮汁に葛粉の水に溶かしたるを入れて葛たまりをこさへ、煮あげたる肉を皿に盛り、其上より葛たまりをかけ、青苔の火どりか山椒の粉をかくれば面白し、味噌煮はこれも三枚

に卸せし肉を小角形に切り、白味噌に山椒か、胡椒の粉か、唐辛子かを加へてすり、味淋を澤山入れて煮立て其内へ此魚の肉を入れて煮つむれば一種の味あり、又此魚にて天麩羅を製するもよし、先づ肉を剝き、山の芋とよく摺りまぜ、温飩の粉に鹽をすこしと味淋を加へてすりまぜ、銀杏、きくらげ、三葉など細に刻みて交ぜてまろめ、胡麻の油にてあげ、煮切醤油におろし山葵を添ふべし、西洋料理に用ゆる此魚のあぶら煮は、ひらめを鹽に漬け置くこと一日にして、悉く其鹽を洗ひ落し、麵包の屑粉に鶏卵を溶き合せ、豚脂にて揚げ、牛酪に蠣汁を和して味をつけ西洋芹を取り合はすべし。

◎貴族煮　記者此頃某料理屋の貴族煮といふを賞翫せしに少し風かはりにて面白き趣あり、开は鶏肉又は牛肉を湯にて煮立てゝ肉はすくひ上げ其汁に醤油と味淋とにて味をつけ、カレー粉を適宜に加へたる汁を先に取り上げ置きし肉と新豌豆の肉（一旦茹でたる）とにかけて食す、これ和洋折衷の料理法ともいふべきか。

◎鰹と鰆　「鎌倉を生きて出にけん初松魚」といふ、此節の河岸には松魚ぽつ／＼出始めたり、直段は隨分馬鹿に高けれど、昔より江戸ッ子は布子は飛ばしてゝも之を賞翫す「時鳥、白い刺身はもう食へず」と川柳にある通りさしみには最も妙なるが串燒も面白し、开は松魚の身を小口切にし、麹に柚子の皮を細に切りて摺りまぜ、醤油にて解き附燒にし青串にさして出すなり、鰆は最早好期を過ぎて安辨當にも之をつかふに至る、照燒は一般のものなるが、蠟燒の仕方は、先づ三枚に卸し、適宜に之を切りて串にさし、裏表とも生醤油をつけて燒き、解きたる玉子を三四遍かけて文火にて燒くべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社交一斑

帷子

流行子

前號には單衣の流行を案內したれば今號には帷子の事を記すべし、例により男女にわかつ

婦人物——帷子地にて單衣さもなして適當するものは鴨川ちゞみなり、(即ち數寄屋の紋織、京都產)令閨向には銀ねづに珍七寶、鐵色地の矢根板、鐵地のかはり一升、焦茶地のあられ、利久の一の字くずし、淡茶地のなまこ、黑地のかはりくずし、筆鐵地の網代、利久のかはり松 川菱、黑地の斜棒、其他鐵、淡茶、利久等の珍小紋の內にて撰まば流行に遲るゝことなし令孃向には藤色地のかはり一升、利久地の分銅崩し、紫根のはす波、淡茶の斜切棒縞、鐵色地の立波、淡むらさきの立わく、等(十圓より十三四圓)次は明石縞にして令閨向には利久淡てつ、藍鼠等の微塵、子持筋、萬筋、千筋、かはり薩摩等、令孃向には小豆、お納戶、淡むらさき、淡ねづみ、銀ねづみ、紫根、淡おなんど、肉色等の瀧じま、松魚しま、一ます、大鹽ま、矢かすり、縞かすり等(六圓半より八圓)次は透屋縮緬(越後產)にして令閨向には銀鼠、壁鼠、藍鼠、肉色等の縞がすり、利久の萬筋、淡鐵、千歲の子持、藍鼠、銀鼠等の薩摩、棒縞、大名、兒持筋等、令孃向には銀鼠、淡鐵、藍ねづみ、淡藤、紅かけ等の大子持亂立じま、ちがひ矢、瀧縞其他のかすり、(七圓より八圓半)次は平地數寄屋にして令閨向には紺地の大名、萬筋及微塵、小辨慶は普通半風なれど變りしものは鐵鼠、かべ鼠の微塵、大名、千筋、木賊一の字くずし及鐵色黑地の薩摩筋、おぎな格子、細格子等令孃向には前記數寄屋縮緬さ同樣なれば略す(紺地にて三圓半より四圓半、かはり色にて五圓より六圓)次は越後縮なるがこれは例によりて紺地のかすりにて別に變りしものもなく流行は在來のものなり(四圓半より六圓)

男子物——第一は本場上布(琉球產)にして縞なればさぼけ大名、かすりにて十の字、大名に猫足、猫足に十の字及花かすり等(十圓より十五圓以上三十圓五十圓)次は越後上布にして縞柄にて大名、萬筋、千筋、微塵、等絣には五十より百までの十の字、及花かすりにして價八圓より十五圓、次は白地の上布なるが本場にて六圓半より八圓半、越後にて九圓より十二圓、但し本場は地質粗くして柄また野暮なれど越後產は地質細にして柄また意氣なり(大名、棒縞、井桁かすりの如き)次は越後の錦縞(二圓半より三圓)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

因に記す東京三大呉服店の內大丸、越後屋は已に賣出を終りしが白木屋は例年の通り來る六月一二三の三日間夏物の賣出を爲し寄切見切物を澤山來客の需に應ずといふ

雜　錄

慶應義塾童子寮（上）

燧　關

慶應義塾の家族的學校たるは、何人も皆よく知る處也。而して此の家族的學校中、起居生活の最も家族的なるは、少年寄宿舍即ち童子寮を以て最となす。われ曾て三田に遊び、此の童子寮に起臥すること殆んど三年、想ふに此の世界に精通するの一人ならん。今當時を回想し、茲に『慶應義塾童子寮』の篇を草す。聊か少年諸君の覽に供せんとて也。

◎童　子　寮

慶應義塾寄宿舍（舊講堂）の玄關を入り、左に折れ大人寮の廊下を辿り、南の方十餘間、一曲して左を指す、一棟あり屋二層、長く東方に走つて架す。是れ即ち童子生寄宿舍也。

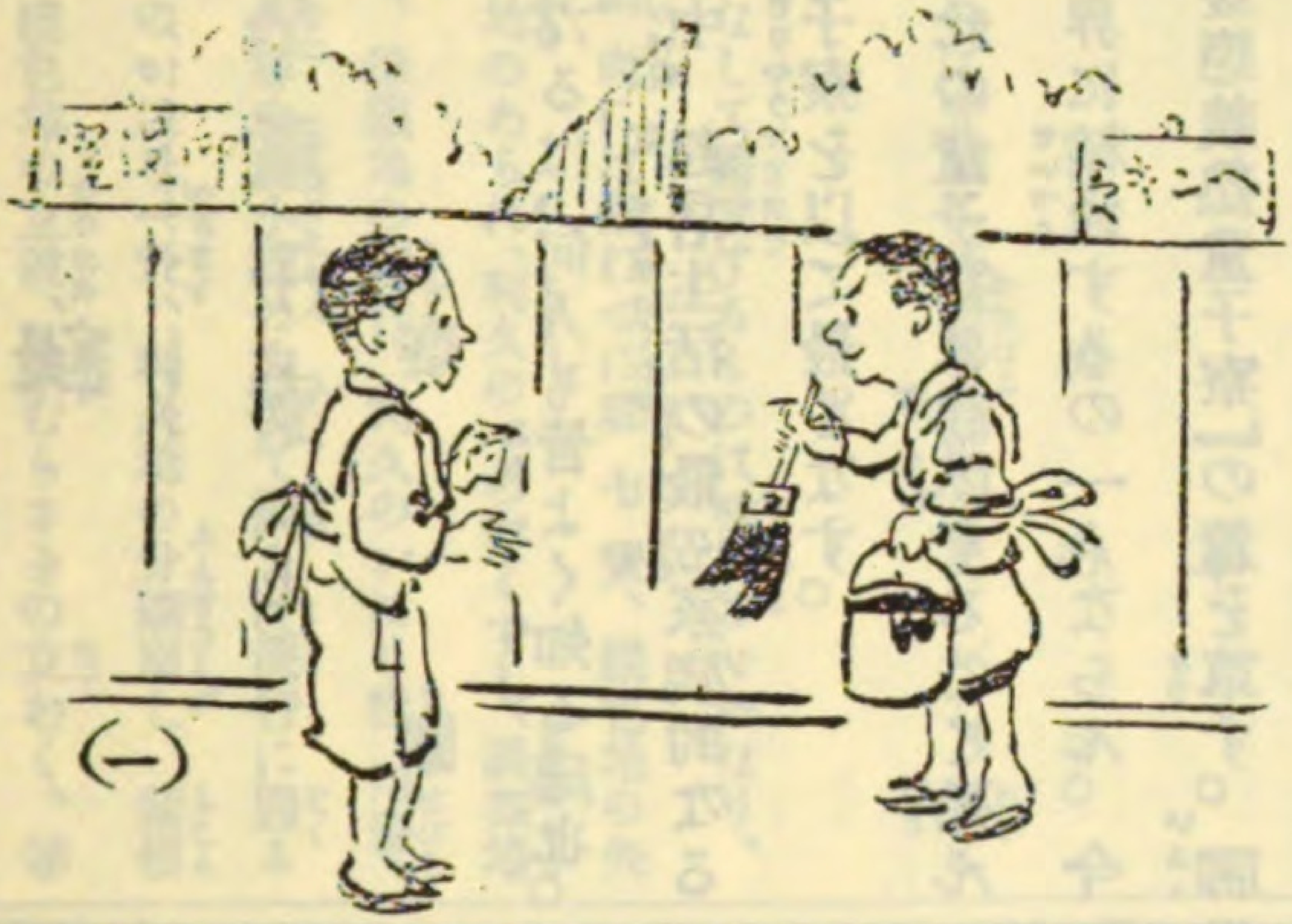
建物は、日本風にして、殆んど二十餘年前の建築に係る。然れど掃除の行屆けるが爲めか、外側の古びたる割合に、內部は極めて清潔也。間數は階の上下を通じて、總べて十六、一室の廣さは十疊乃至十二疊敷とす。室の前後は、朝夕、小使に依つて淸めらるゝ脩廊下あり、以て各室の交通に便ず。二階に上るには、梯子四箇あり、一梯以て二室に行くを得、階上の室外には、廊下なきを以て室は、階下に比して二疊敷の廣さを享有し得るも、對面の室との交通の外は、一々階を下り、又は他の階を登らざるべからず。又室には二箇の戸棚あり、一箇の戸棚には、夜具、行李等を修め、一箇の戸棚には、下駄函、炭函、石油鑵、洋燈等を納るなり。階下は五人、階上は六人を以て一室の定員と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なし、此の中各〻室長一人を戴く。而して室長の上に寮長一人あり、以て全寮の管督に任ず。

◎寮　長

寮長は、童子寮の最上長官にして、童子生の進退は、皆此の人に依つて支配さる〻也。然れば、塾監局の之れを任命する、最も丁重愼密にして、之れを任命する前に、一應敎員會議を開き、而して平素最も德望あり、且つ學術、品行共に優秀なる若干の敎員を撰み、以て之れに任ずる也。



(一)

寮長の職務は、室長の報告を受取り、且つ躬親ら童子生の品行、勤勉等を視、其の學業を奬勵し、其の品行を匡正し、起臥を管督するの外、大運動會にありては、童子寮を代表し、小運動會(童子寮のみの運動會也)には、自ら會長となつて各般の事を指揮し、且つ總理す。然れば寮長の履聲は、最も多く童子生の畏敬する所、苟もチヤラ〳〵と音立て、寮長の廊下を行くを聞かば、如何なる亂暴の少年も、皆襟を正うして坐するを見る。

童子生の臥床は、夜の十時なり。十時三十分は、寮長が、『寮長』と銘打つたる提灯振り照らして、寮の中央なる自己の室より、見廻はりに出づる時也。故に童子生は、外出より如何に遲く歸るも、十時以前には、必ず室にあるを常とす。若し寮長の見廻はりに三度以上無屆にて室を空うせば、先づ寮長室に召喚せられ、懇懇の說諭を受くる也。而して倘此の不埒の續くことあらんか、寮長は室長を召集して、其の意見を尋ね、其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の協贊を得て後、不埒漢を塾監局に召喚し、塾監局長ともゞ、太く其の行狀を責め、輕きは退塾を命じ、重きは退學をも命ずるに至る也。

寮長は、斯くの如く重大の權力あるものなれば、童子生の之れを畏るゝこと嚴父の如し。然れども平素温顔、人に接するを以て、寮生の怨恨を買ふが如きは、殆んど稀れ也。是れ塾監局の其の撰を丁重にするが爲か。

◎室　長

室長は、寮長の下にあり、常に童子生と室を同うして、其の室の童子生を管督するものなり。

室長を撰任するは、塾監局の最も愼む所也。撰擇一籌を誤らんか、獨り其の室の年少を傷ふのみならず、旋いて全寮の風儀に關すること少小にあらず。之れを以て塾監局は、大人生中最も品行よく、學術俊秀の上級生を推擧し、一應寮長と協議の上、改めて之れに室長を囑托する事也。

室長は、固より報酬等は皆無也。只室料月額二十錢を免ぜらるゝのみ。而して其の職務は、同室生の行狀を管督し、下讀みの質問に應じ、時々寮長に同室生の報告をなし又月一回の室長會議に莅み、小運動會には參謀官として之れに臨む也。然れども寛に失すれば、諸生侮慢の念を長じ、嚴に失すれば、寮生擧つて、放逐策を講ず、うるさくして面倒なるは、室長ならんかな。

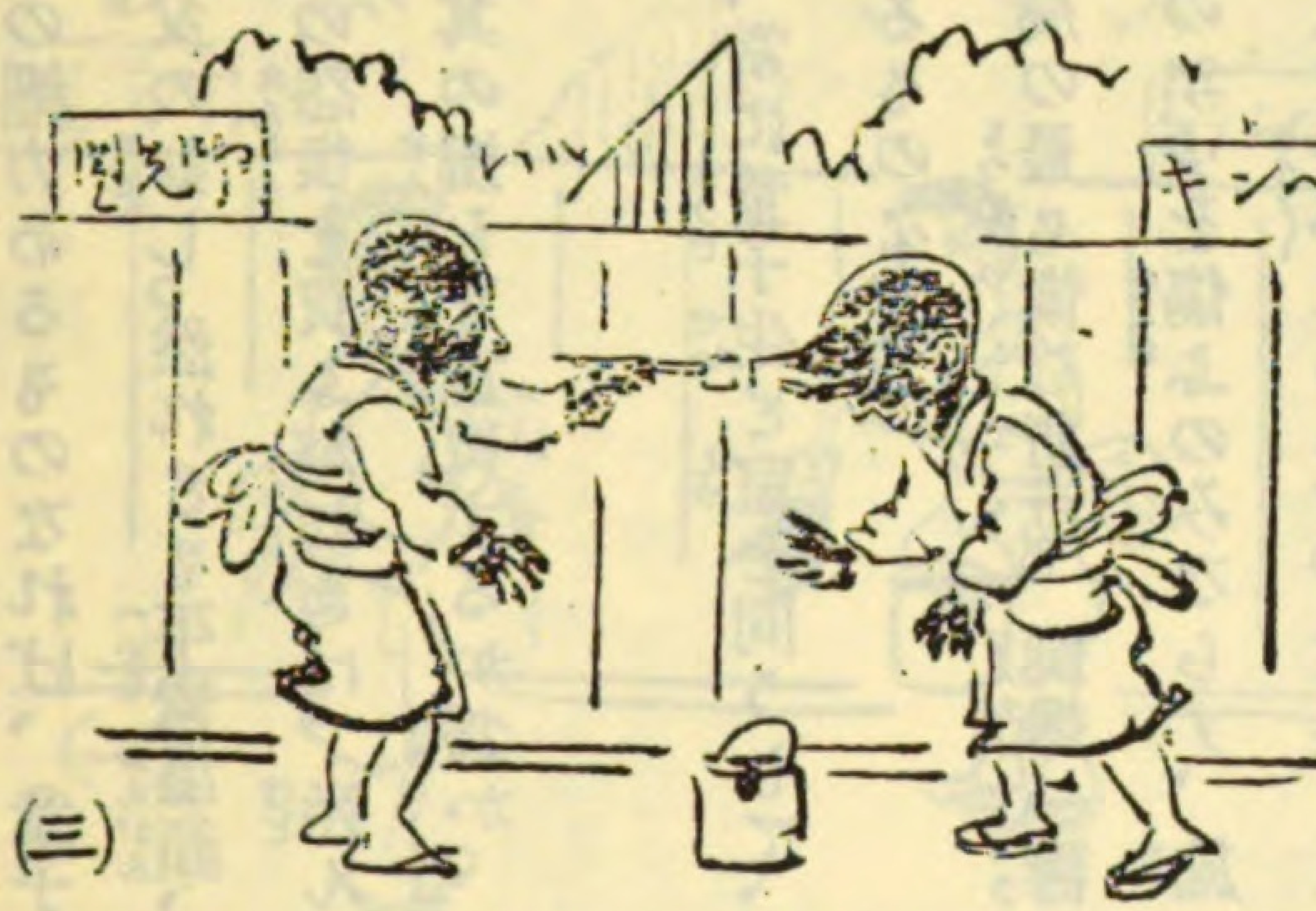


（二）

◎入塾及び退塾

幼稚舎を卒業し、若しくは年長の故を以て、本塾に轉學するものゝ外、之れに入塾せんとするには、先づ塾

監局に入塾届を出す也。塾監局は、一應、入塾志願者を召喚して、童子寮に於ける諸規則の大躰を說き、而して後入塾を許す也。又退塾の際は、入塾の時の如く、塾監局に向て、退塾届を出す也。塾監局は、其の届を見、本人を召喚し、其の理由を尋ね、若し其の下宿屋に移るが如き塲合には懇々說諭を加へ、其の惡習に染まざらんことを戒め、後之を許可す若其の下宿屋にして、評判あしきものならんには、決して退塾を許さず。而して本人の承諾せざる塲合には、直に保證人に通知して、之れを引渡す也。



（三）

◎童子生

童子生は、上寮長に隷し、下室長の監督を受け、以て身心の練習を勤むる也。朝は六時に起き、臥床を揚げ、顏を洗ひ、席を淸め、兎角する程に、食事の鐘は鏘々として響く、時に七時也。卽ちぞろ〳〵と室を出で、大入寮玄關の右側の食堂に入り、「賄」を叱咤して食事を終ひ、歸りて前夜下讀みせる其の日の課程を復習し、疑問を室長に質し、以て其の時間の來るを竢つ。軈て時間も來れば、冊を挾んで、講堂に入り、三時間若しくは四時間ヶ程、講習の後、室に書籍を抛り込み、直に塾後の運動場に馳せ向ひ、食事までは、種々の遊戲に躰力を養ひ、晝食後も亦運動場の重なる主人となつて、遊び狂ふなり。晩餐後は、入浴の爲め、丘を下り、浴後は市街を散歩し、日沒、塾に歸つて、青燈一穗、翌日の課程に取り掛る也。

課程の下讀み、其の業を終れば、彼れ等は思ひ〳〵に

他室を訪ひ、談話に時を移し、十時の鐘を聞いて、眠に就く也。

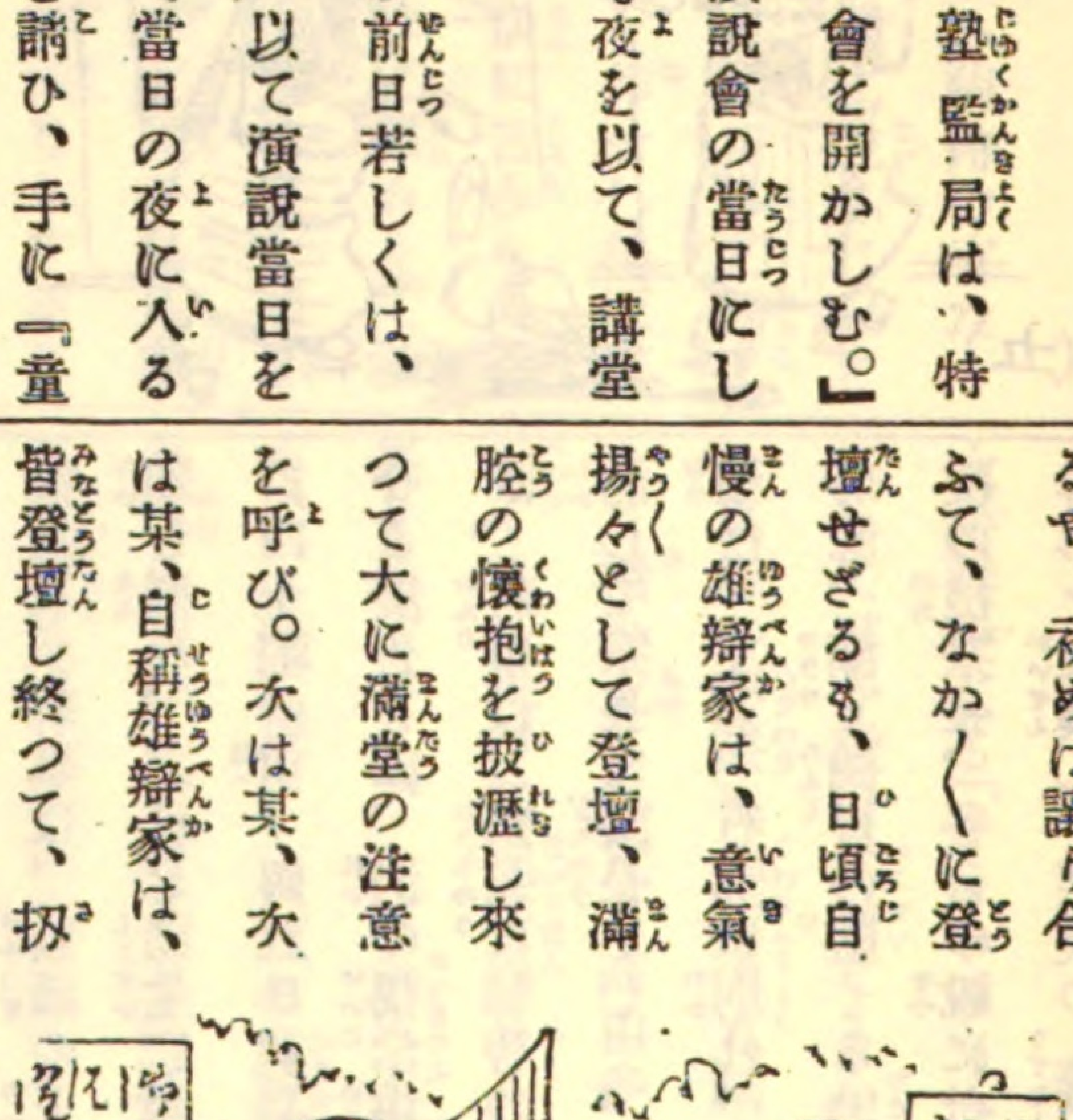
以上は童子生の日常なりとす。

◎演説會及び討論會

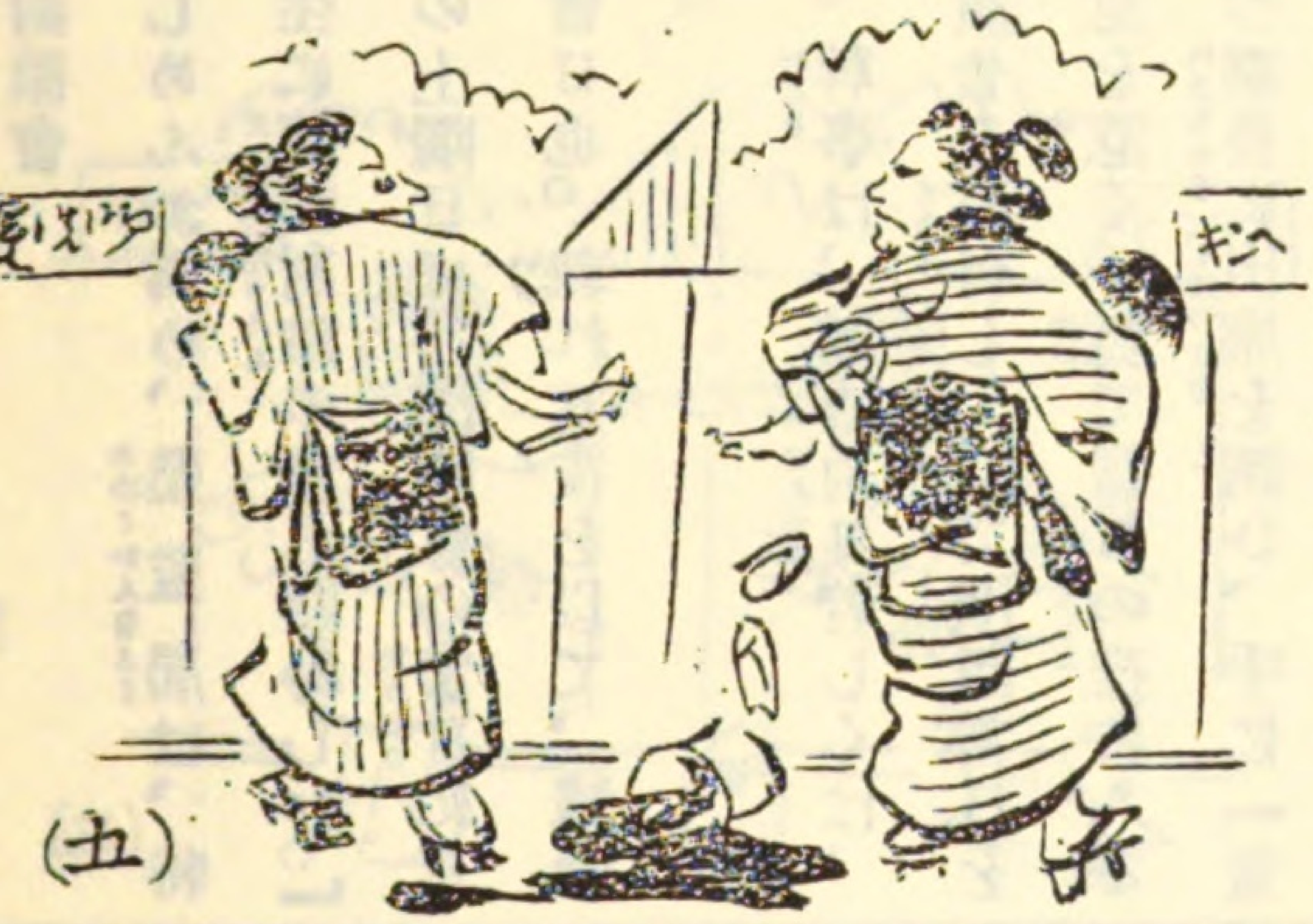
童子生の辯舌を發達せしめんが爲め、塾監局は、特に寮長に命じて、童子生に演説討論の會を開かしむ。會は毎月二回也。第二の土曜日は、演説會の當日にして第四の土曜は、討論會日也。孰れも夜を以て、講堂北側の演説館に催さる。

今日は、第二土曜日也。幹事は、其の前日若しくは、前々日、寮の出入口に廣告を貼付し、以て演説當日を指示し、以て寮生の注意を惹く。軈て當日の夜に入るや、二人の幹事は、先づ寮長に出席を請ひ、手に『童子寮演説會記事』と題する帳面と、洋燈筆墨等を持ち、演説堂に入り、諸辯士の入り來るを待つ。

程もあらせず、諸辯士は各々二錢の會費を捧げて、入り來り、全く席に着き終る頃、寮長は入り來る也、時に幹事の一人は、先づ壇に登つて、開會の主旨を述べ、且つ成るべく多數の登壇者ありたき旨を望み、壇を下るや、初めは讓り合ふて、なか／＼に登壇せざるも、日頃自慢の雄辯家は、意氣揚々として登壇、滿腔の懷抱を披瀝し來つて大に滿堂の注意を呼び。次は某、次は某、自稱雄辯家は、皆登壇し終つて、扨て後は引ッ込み思案の惡辯士なり、君ヤリ玉へ、是非演説し玉へと百方幹事を勞し、不勝無性に壇に登り、羞かしげに一揖し、モヂ／＼しながら、懷より一二枚


(四)

の原稿を取り出し、半、朗讀するが如く、演說し終つて、ホッと一息吐くの樣、氣の毒にも亦いぢらしき限りなり、斯くて辯士は殘らず辯じ終れば、寮長は、嚴めしく壇に登りて、先づ諸生の演說に付き、精細の批評を下し、夫れより將來の希望を述べ、末段は、諸生の品行について夫れとなく諷刺を加へ、以て此の會を閉ぢ、豫て小使をして整はせ置ける茶及び餅菓子——餅菓子四箇を紙包みにせるものを諸生に頒布す。


(十)

此の時迄は、深く人の背後に潛み、成るべく寮長、幹事の目に觸れざるやう勉め居たる橫着者は、餅菓子と聞くや否、眞ッ先きに驅け出し、人をして其の出沒隱見の妙に驚かしむるもあり、斯くて氏の茶話の間に、寮長及び幹事は、協議の上、來るべき第四土曜の討論題を撰み、之れを諸生に報告し、以て此の會を散ず。」

第四土曜の前、四五日、幹事は、討論題及び日時を大書せる廣告をば、例の揭示場に揭ぐ。既に其の夜となれば、幹事は、寮長に報告の上、諸生を促し會場に出づ、而して寮長は議長として、其の席に着く。場は、左黨、右黨に別れ、各々雄辯を鬪はし、討論二時餘、漸く論旨の盡くる時、議長は之れを採決す。採決の後寮長、各自の說に付、批評を下し、會後次月の幹事を改撰し、茶菓の饗を受くること演說會の時の如し。

童子寮に於ける規定の錬舌會は、右の二回なれども、特志の童子生は、特に團体を設け、毎週、期を定めて、

講堂に演説會を開く、其の會名左の如し、

和氣廣蟲（口繪のゑとき）

和氣廣蟲は清麿の姉にて孝謙天皇に仕へ倘侍の官たり清麿宇佐より歸り道鏡を計りて大隅の國に流されしとき廣蟲も亦豐後の國に流されしが程經て赦されて都に歸りけり廣蟲性温和順良嘗て押勝が亂を作せし後天下飢饉となり加るに疫癘流行して萬民塗炭に苦みその兒女をさへ養ひ乘て路傍に捨るもの多けれど誰ありて救護せんとするものなし廣蟲時に女官たりこの事を聞き憐憫の情に堪へず人を遣して此等の兒女を拾ひ集め處置の施し得べきはこれを施しけれども如何ともすることなきもの猶八十三人ありき廣蟲悉くこれを己が兒となし敎を埀れ產を分ちけるが朝廷にも漏れ聞えて其八十三人の者へ葛木の姓を賜はりしとぞ

カピヲラニー

在京都　紫櫻生

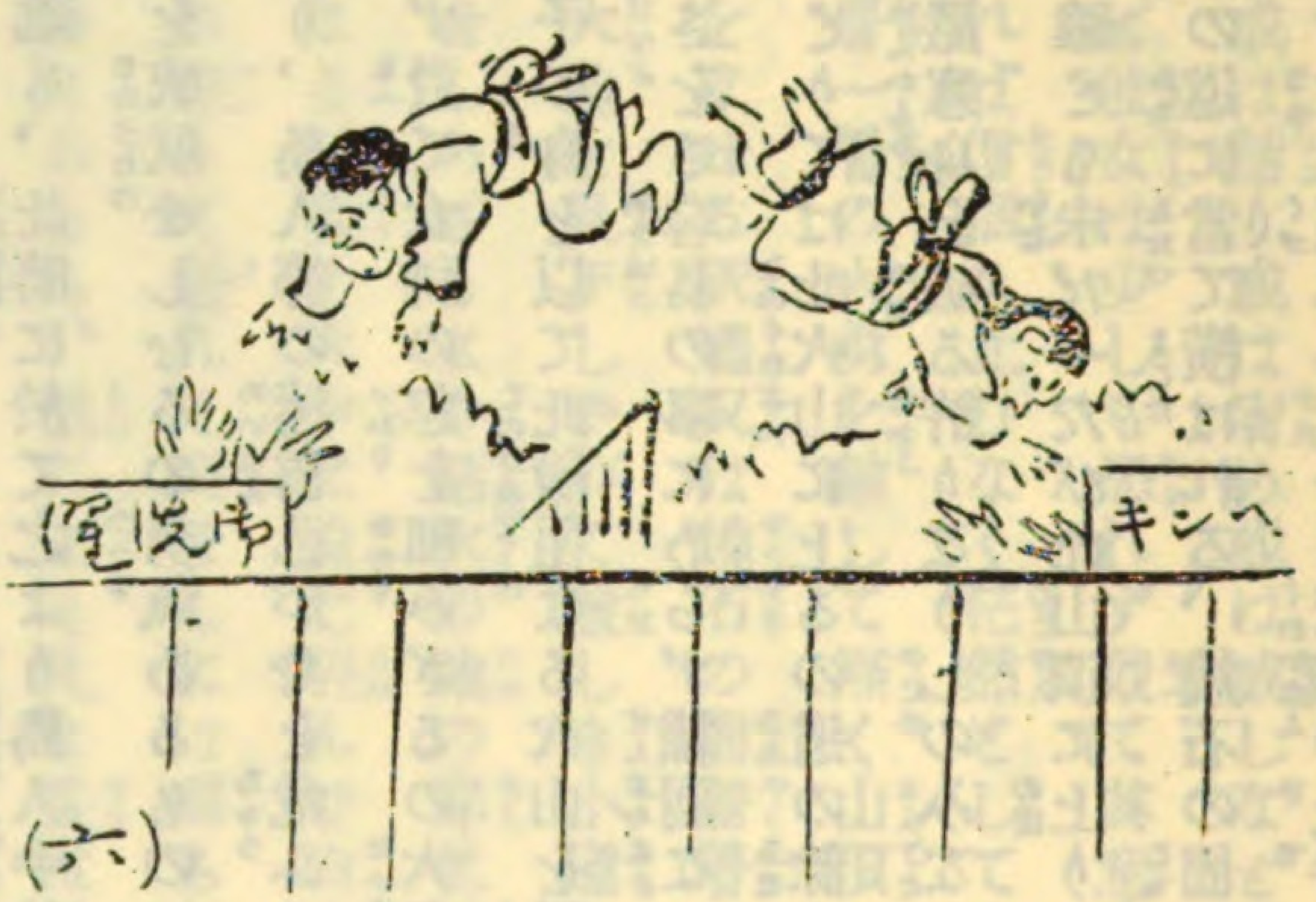
太平洋中なる「サンドウイッチ」諸島は世界稀有の美島にして其多數は勉精なる小珊瑚虫の形成する處たり、此島嶼の中央に火山力と稱する一種の偉大なる力によりて積み上られたる高山多くあり、吾々若し船を島に近くれば先づ二哩半の高さに於て中空に聳立せる二高峯を見るべし、一は永久不絕の雪を以て皚々として白く、一は黑色――火口の高熱雪をして山に白色の外套を被らしむるを許さゞれば其火口より流出する燒石及び灰燼を以て黑色――なり、一は數十年來噴火の作用を示さず、一は世界に於て最も恐るべき活動火山にして「キーラウエーア」火口と名くるものなり、火口は實に周圍六哩乃至九哩に渡りて、流動躰なる猛火の一大

地なりと云ふべし、此火池の上には日中は銀白色の雲の如く、夕景には輝赤色に、夜に入りては焔の林の如き水蒸氣の絶へず叢るを見る、黑色又は石竹色の岩石を混じて山側を迸下する火岩の大流の中に於て二大圓錐体の悽蒼たる半天に聳ゆるものあり、火口の周圍は堅硬なる火山石の險岨にして灰燼之れが上に積み重なり處々四千尺の高きに達す、然れども又餘程低き處もありて火口の内部を一層精密に窺はんと欲する人は此等の處より險阻なる小道を辿りて熱火に近くを得るなり、山頂には奇異なる灌木あるのみにして熱帶地方殊有の繁茂せる樹草を見るとなし、山は常に驚畏すべき景色を以て充さるゝと雖ども殊に其爆發の時に際しては悽絶實に想像の外なるものあり、活火の瀑布をなして小坂を急下する岩石高熱のために半ば流動躰となりて血色を帶びたる狀玆に山大の人躰ありて之れが血管を破りたらんには斯くやあらんと思はるゝ許りなり、此大流に當て立つもの一として倒れざるはなく、燒石一たび海に注ぐときには激烈なる響を發して海水を沸騰せしめ中空に濃き雲を生ずる樣は其實景を見し者にあらざれば如何に敏捷なる想像力を有する人と雖ども到底心に畵くと能はざるべし、

斯かる天然の感化を受くる愚民が一種の迷信を生じて種々なる偶像的神靈を拜崇するに至るは又自然止むを得ざるの事なりと云ふべし、今一歩を進めて云はんに斯かる迷信を抱くもの只獨り「ハワイ」人のみにあらず、昔時文明に進みたりとて自ら誇稱せし地中海邊の白人に於ても之れあるを見る、即ち彼の英語の「ボルカノー」(火山)なる語は地中海邊に於ける多くの噴火山は「ボルカン」なる軍神の鍛冶場なりとの古人の想像より來れりと云ふを以ても知るべきなり、「サンドウィッチ」諸島に於ける迷信は稍之れと異なり、恐ろしき「キラウエーア」は「ペール」女神の住家、山頂なる大火口は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其浴場にして、山側の處々に生ぜる灌木は其頭髪なりとは島人の間に非常なる勢力を有せし迷信なりき、此女神甚だ嫉妬深く苟しくも婦人となれば如何に弱年の少女と雖ども其山に觸るゝを許さず、若し敢て其の意に悖るものあるときは烈しき破碎を其島全躰に與へて後初めて心を安んずるとなり、島人は終に漸次斯の如き迷信の狀態より脱するの端緒に就けり、外國宣敎師の傳道と歐洲各國との交通は彼等をして其迷信の中に彷徨するを耻づるに至らしめ、日一日島人の信仰は前に凡ての物を捧げて拜せし種々の神々



(六)

を去つて天地の作り主なる唯一の神として基督敎の神に就くに至れり、されど尙ほ彼等は「キラウエーア」の女神を去る能はず、女神は放逸淫蕩長夜の飮をなし、島人等をして愈よ己れに服從せしめんとて、其兼て貯へ置ける熱湯を四方に散亂せしめたり、「リホリホ」王位を踐むに至つて非常の英斷を以て人民の尊崇して止まざる凡ての偶像を廢棄し、凡ての迷信的の習慣を脱破して、基敎の敎へを入れんと勉めしが、「ペール」女神の僧侶等は活火の山上に其城堡を搆へ、舊信仰を乘てんとする人民を嚇すに女神の怒を以てせしかば王命も力なく、宣敎師の傳道も無益の徒勞に屬するのみなりき、

斯く危急の時機にありては何れの時代何れの國に於ても善く英雄を出すものなり、此島に於ても丁度此迷信救ふべからずして人民は愈よ「ペール」僧侶の餌となり去らんとする時に當つて「ペール」の無力を證し人民

を救はんとの非凡なる決心と信仰を以て顯はれ出でたる一人の婦人ありぬ、其名を「カピチラニー」と云ひて「ハワイ」の演説家「ナイヘ」の妻なりき、彼女は已に充分の決心を有せしと雖も、此時に於て之より島人中彼女に賛同して其企を成就せしむるの勇氣あるものは一人だになかりしなり、島人等の迷信己が身を危ふせんとするにも拘はらず敢て女神の怒を顧みざるの大勇に加へてあはれ一女子の身を以て此險阻なる火山を攀ぢ上らんとの決心をさを容易の事にあらず纖弱なる「ハワイ」の一婦人にとりては此火山に上るの道の餘りに險惡に、其頂の嚴寒身を破る許りなりしのみならず蓋し如何なる人と雖とも未だ一たび此山頂に上りたる事はあらじ、巖礁の道に當て横はれる、燒石の固着して滑かに趺り易き、將に壞れんとせる灰燼の土手の如何にも危げなる、凡て此等は實に海岸育ちの貴婦人には珍らしき否な寧ろ忌はしく恐ろしき景なりし也、高熱のために焚んばかりなる其山の嘯哦、此悽愴たる大空、半ば冷却したる燒石よりたち上る白き蒸發氣の最と恐ろしげなる、凡て此等のものは如何程剛强なる人の心をも恐怖と不安とを以て充たさしめたり況んや此等の景色は「ペール」女神の怒りの徵なりとの迷信の中に育てられ、今は却て此權勢ある女神の名譽を碎かんと企つるの人に於てをや、嗚呼恐ろし——遠からぬ前多くの人は此山腹に於て有毒なる火山氣のため窒息して死せり——島人等は相傳へて女神の吐き給ひし息に觸れしなりと恐れあへり、

然れども「カピチラニー」は大能なる唯一の天神に信依する事厚く、一女子の身の輕しと雖ども世界の文明のために盡さんと欲し、迷夢の中に漂へる愚民の眼を開かんと熱望して止まざる身其信依せる神の助けなかるべしやはとて、斷乎として動く景色もなく、終に漿果を手にして勇ましく山腹にかゝれり、蓋し漿果は當時

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

島人等が神聖なるものとして尊崇し婦人の之れに觸るるを許さゞりしものなり「ペール」僧侶も今は專捨て置き難しとや思ひけん、「カピチラニー」が後を追ひ來り巖礁の間に圍ひて或は詰り或は宥め或は威しなど百方其手段を盡せしかど彼女は少しも恐れず敢て其意志を貫くべしと云ひければ僧侶も止むなく茫然として立ち歸れり、彼女今は層一層の大勇を皷して漸く山頂に達し先づ火口の周壁をなせる灰燼又は燒石の固着層の上に立ち遙に熱火の大池を見下しやがて險しき小道を下りて何物をも沸騰せしめざるなき活火の池の岸に至り其手に持ちし神聖なる果實を火中に投じ叫んで曰く「妾若し「ペール」の怒りに觸れて死せんには即ち其大能を恐怖する事もあらん、然れども見よ妾は其怒りを恐れず「ペール」を輕侮せん妾は女神の激規を破れりされど尚ほ死せず安全にして此處に立てり之れ眞正なる唯一の大能に信依すればなり、あゝ卿等此島の人々よ今は「ハワイ」の偶像の無力なるを察し來りて上帝に奉事せよ」

彼女は信仰の戰ひに勝ちて快く山を下りぬ、

「グリース」の昔時「エムペドークルス」なる哲學者ありて身を「エトナ」山の大火口に投じ以て千古無窮の美名をなせり、然れども「カピチラニー」が同胞の迷信自ら悟る能はざるを憐み敢て身を殺して顧みざりしものとは比す可くもあらざるなり

烈女せんに付て

長の舎主人

さきに家庭雜誌第七十三號に於て烈女せんの性行を公にし世の龜鑑として十分の價値を示されしは獨りせん女の爲のみならず幾許か世道人心を皷せしめたるならむそれかあらぬか此頃せん女の不幸を憐れみせん女に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

全情を表し其情を慰めんとて送られたる歌數首あり曰く

烈女せんに送る　從二位　東久世通禧

國のため死ねと敎へし足乳根の
　庭のをしへのいさきよき哉
佐々木信綱

忍ひても忍ひかねらむ我影の
　かへにうつるを獨り見る夜は
相澤朮

唐人のとなり撰ひしたくひにて
　庭のをしへのなつかしき哉
松岡隣

夫を助け子を敎へつゝ國に盡す
　心のむくいいかてなからむ
荒山德隣

なとかくはうきふしにのみ逢ぬらむ
　國の盡せる眞心にして
石榑千亦

國の爲君かまな子をさきたてゝ
　淚も見せぬことのをゝしさ
藤巻俊平

播磨潟いその夕へになく鶴の
　なけきや君のなけきなるらむ
安藤直方

國の爲かれにし水のみなかみは
　母のめくみの露にそ有ける
祐乘坊釓郎

亡人のある世なりせはいとゝしく
　今日の譽の嬉しからまし
細川玄重

聞にたに忍ひかねたる心ねに
　いさほしくはた悲しかりけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

川名鍋石

つかのまの別れも歎く人にしも
君のほまれをいさや語らむ

矢田猪平

まもるへき神そいかにや妻の道
つくしゝひとを婿にはして

井原豊作

なか〳〵に勇ましきかな國の爲
死ねと敎へし親のこゝろは

正五位竹屋氏夫人　雅子

はくゝみし若木の花はちりはてゝ
殘る梢のあはれなるかな

酒井愛子

大君にさゝけしものと思ひても
梢ちらしゝかせうらむらむ

竹山静子

唯ひとり殘る心よいかならむ
思ひ見るたにかなしきものを

琴陵保子

うみの子の立しいさをに足乳根の
高き操も世に知られけり

琴陵瑞枝

國の爲敎えし花ともろともに
庭のをしえも世に志られけり

琴陵八千代

くにの爲盡しゝ君かこゝろには
ますら武夫も及はさるらむ

佐藤朝恵子

今はたゝ此なてし子を賴みてし
母その歎きいかにか有らむ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山本繁子

青柳のかよわき身もて夫と子に
いくその操むすひそへけむ

貴族院議員澤氏女　豊子

撫子を君にさゝけていさゝかも
歎く色なきあはれはゝき木

井關照子

君の爲わかひとつ子を先たてゝ
消殘る身よなにこゝちせむ

海上二美談

或る日英國の近海が暴風雨で荒れて居た。

救助船――陸から間近のところで、難破の信號を擧げて居る船舶を救ふ爲に、常に準備を整へてある救助船が、將に漕ぎ出さうとしたが、生憎く水夫が一個足らんかつた。水夫には持つて來いの「チッドブラウン」といふ若手の漁師が、これに加はらうとした。彼れは傍に立つて居る婦人の前に腰をかゞめて、淸く落ち付いた聲でいッた。

「おつかさん、私を遣つて下さいますか？」

「チッドブラウン」の母は六月以前から寡婦である――といふは渠れの良人は今年の春。いと穏かな沖へ漁の爲に出で往つたが、俄かに大變な暴風が起つて、現に乘つて出た船の破片はそのゝち流れ着いたが、良人は終に歸らない、アゝ、彼れは正しく溺死したのであらう？

「お止し、マァこの暴風雨に何をいふのだね〜」

と母は「チッドブラウン」を叱からうとしたが、その言葉が唇まで出かゝつた時、渠は今や沈沒せんずる沖の船に眼を注いで、アゝあの人達は嘸難儀して居るだ

らう、モシもあの人々が不幸にも溺死したら、幾多の家族がどんなに悲しいとだらうと考へたので、「テッドブラウン」の方を向いていつた。

「アヽ往つておいで、神さまが必然お前を私の手まで歸して下さるだらうから」

母はなるだけ落ち付いた調子で斯ういつたものゝ、到底長く海濱に居ることが出來んかつた。それで急いで渠の寂しき家に歸つて、良人を亡くした悲嘆と、息子の冒險とに就いて、獨り胸を痛めて居た。

＊　＊　＊　＊　＊

夜が曉けたら暴風雨は既に止むで居た。波浪はまだ中々高いが、これも程なく收まるだらう。

あはれ！可惜船は終に沈沒して仕舞つたが、救助船は天晴れ働らいて、辛らく乘り込みの人々を助けて歸つた。

夜を徹して働らいた「テッドブラウン」は、無事に我家へ歸つて來たが、何故か彼れは戸口でためらうて居る。何故彼れは後じさりするのであるか？

「テッド、ブラウン」の傍に丈高き一個の男が立つて居る。これも海の墓場から助けられた一人で、頗る疲勞はして居るらしいが、それの眼には充分愛惜を湛えて「テッドブラウン」を眺めて居る、また多くの村民はこの二個を取り圍んで、頻りに目出たい／＼など、いつて居る。

「一躰誰れがこの話をするつもりだい？」と喜びに打たれて、殆んど聲も出ぬらしい樣子で一人の村民がいつた。

「おれが！」と一人は答へた。

が、この時「テッドブラウン」は既に家内へ飛び込んで、母親の腕に凭りかゝつて居た。

「お聞きなさいおつかさん！　昨夜助けられた内に一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人の漁師がありました。彼れは先度沖で暴風に遇つて外國船に救はれましたが、直ぐ歸るとは出來ませんかつた。その船は生憎他の方へ往くのでしたから——で、その女房や朋友は正しく、モウ亡い者と悲しんで居りました。その漁師は遠方へ着いて、直ぐ英國行の船に乘り込みまして、漸々昨夜自分の家のヅイ眼の先きまで來たンですが、又暴風雨の爲に幾度か生命を失ひかけましたが、折りよく私共に救はれました、おつかさん、これが眞實の事として考へて御覽なさい、マア一躰誰れでせうか、アヽ、あなたが自分の悲みの最中にも、他人の辛らさを察して私に往と仰しやつた時に、よもや阿父さんを助けに遣るとは思はなかつたでせう、如何してあなたが……

「チツドブラウン」の言葉のまだ終らぬ内に、足音がして彼の助けられたる漁師は這入つて來た彼は曾つて自分が座り馴れたる圍爐裡の傍へ起つた時に、母は「やあ」と喜び叫んでいきなり良人の腕にしがみ付いた、マアその喜びはどのやうにあつたらうか？

（麗亭生譯）

ジヨン、メーナルドとなん云へるものは、湖水（米國の大湖を云ふ）の邊にて、信神者として、又正直なる敏捷なる水先案内者として、最も其名高かりけり。彼はデトロイトよりバツフアローへ往復する一滊船に乘込み居りしが—或る夏の日の午後—當時は滊船の端艇を載せ航行するもの罕れなりき、煙が其船の下方より騰ると見えし程もなく、船長は絶叫せり。

「シンプソンよ下へ行つて何事が始まつたのか見て來れ」

シンプソンは灰の如く蒼ざめた顏をしながら、飛び上り樣言へり。

「船長、船に火事が」

其時船上に於て「火事だ〳〵」

總べての加勢は呼び集められたり、水桶を以て火に水を注ぎ掛けたれど徒勞なりき、甲板には松脂と松根油とが夥しく排列べありければ、船を救ふ規畫は無駄なること判然たり、乘客はあなたこなたに驅け廻つて水先案内を捜しぬ。

「我々はバッファローから何の位離れてる」

「七哩」

「何時間掛つたら着く」

「今の速力で四十五分」

「安着すれば好いが」

「ア、此處を！御覽なさい煙がモー捲き上つて來た、皆樣命が惜しくば早く支度を」

乘客と水夫とは—大人婦人及び小供—船の前部へ群がり、ジョン、メーナルドは舵の所に突立てり、火炎は一面の火より渦き來り、烟の雲も立昇りぬ、船長は喇叭器もて喚き叫びたり。

「ジョン、メーナルド」

「エー何ですか」

「貴公舵の處に居るか」

「エー居ります」

「船は何方を向ひとるか」

「東へ倚ッた南東です」

「南東へ向け直せ而して岸へ船を遣れ」と船長は命ぜり。

段々近く段々近く倚は一層進んで、船は岸に近寄りたるに、船長は又も呼びぬ。

「ジョン、メーナルド」

今度は返事の仕樣力なく聞えたり、「エー何です」

「貴公モー五分間心棒が出來るかジョン」と船長陳べたり。

「南無不動明王！私は耐忍します」

此の老人の毛髮は頭皮から燒け始め、片腕は無用とな

り、膝は甲板を支ゆる桁の上に付き、歯は正しく揃ひ居り、他の片腕を尚ほ車輪に掛けつゝ、彼は岩の樣に直立なし居りけり、彼は船を岸に着けたり、彼が落命せしために、大人婦人子供達は皆助かりつ。而して彼の精魂は神の御心の許に飛翔し行きぬ。（板倉廉太郎譯）

臺北の風俗

◎當臺北は從來臺灣全島を支配せし中央政府の所在地にしてその繁榮他に比類なきの土地に有之候よし殊に昨年我が領有に歸してよりは尚ほ一層盛觀を極め繁昌日に增し加はり行くの有樣に候城內には西門街北門街府前街及び府後街の四街あり又城外東北の方位に當りて大稻埕西南の方位に艋舺と總稱せる二大市街あり全市支那街にして頗る熱鬧を極め居り候城內は大抵日本商店を以て充され土人の店は僅々數ふるばかりに候

◎大稻埕は戶數四千許りにして居留地近傍の各市街は道幅廣く淸潔にして家屋の構造も亦た宏大壯麗に有之候へども一歩奧へ踏み込めば道幅漸く狹く不潔また驚くに堪へたり艋舺は戶數二千餘大稻埕の奧と同じく道路狹隘不潔にして異臭鼻を衝き實に堪へ難きの感あり所謂賣淫者はこの狹苦しく薄穢き暗黑裡を巢窟として夜な〳〵浮かれ込む幾百の嫖蕩兒を巧みに綾なし居る次第に候　（以下次號）

社告

本社主筆德富猪一郎愈々去廿日を以て橫濱出帆歐米漫遊の途に上り候に就ては彼地にて觀察致候各國、各地、各都至る所人情風俗及生活の眞相特に家庭に關する事情は細大漏さず一々通信を以て舊に倍し執筆を勉め愛讀諸君に孤負せざらんことを期し申候今度本紙に如何なる新生面を開くかは紙上にて御覽被下度候也

次號歌苑欄三十一文字課題は

夕時鳥。梅雨久。海邊雨。述懷

五月　　家庭雜誌社

○來る六月一日ゟ三日間夏衣賣初仕候特に本年は新形新柄物澤山仕入有之候間不限多少御用向偏に奉願上候

○寄ぎれ

○見切反物種々

○蚊帳類

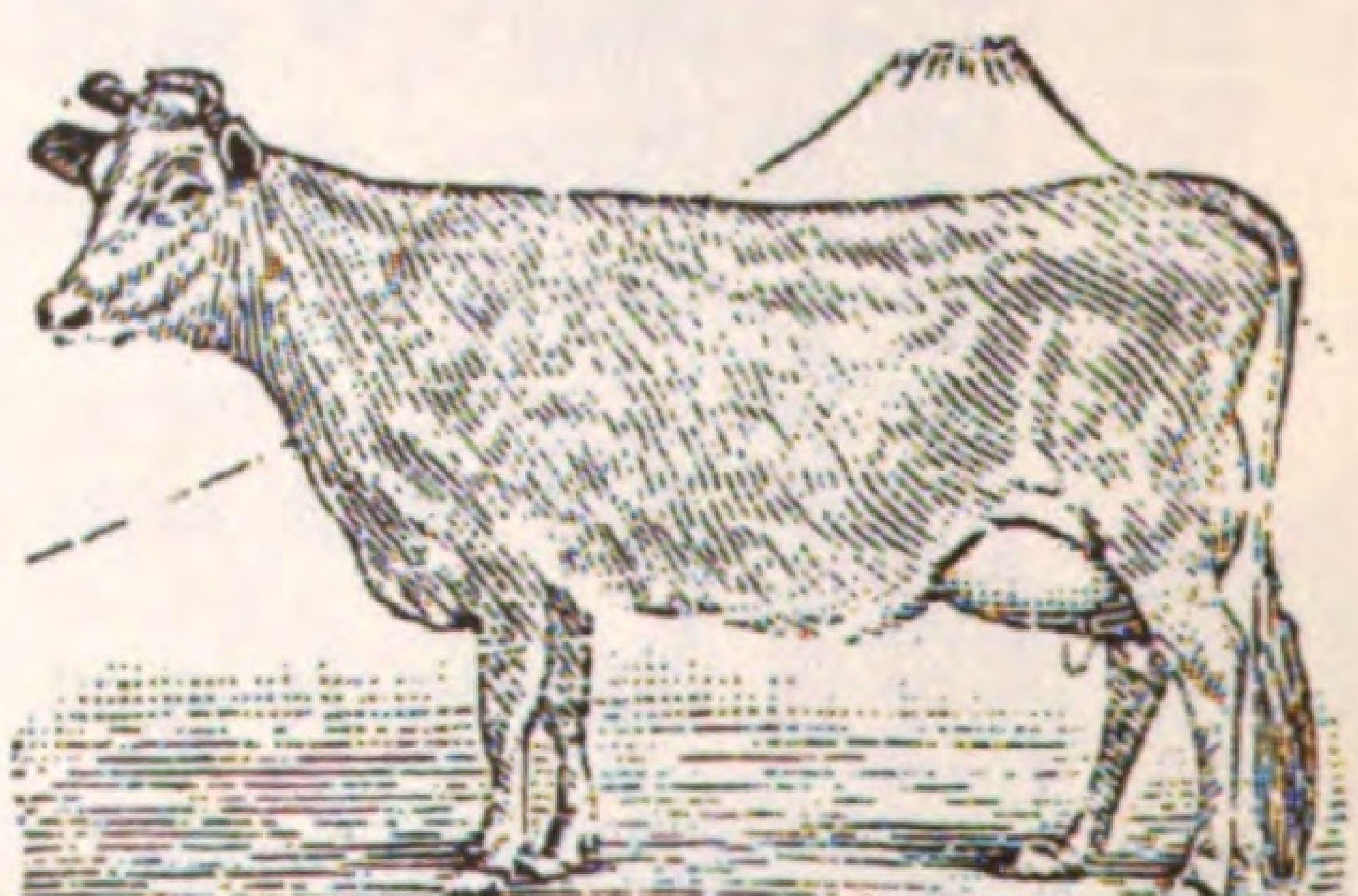
○輸入品新着

○豫て歐洲各國へ注文致候新柄服地及夏外套地澤山入荷一際勉強仕候

日本橋通一丁目

白木屋吳服店
洋服店

開店午前四時三十分
電話四百七十五番



舍主宇都宮仙太郎は米國ウイスコンシン州農科大學乳業科得業生なり
畜牛は毎週嘱托獸醫の診斷したる健全の者なり
醫科大學にて毎日試驗濟の上御買上に相成居れば乳質の善良にして安全なる推して知る可きなり
代價は世間並に候御試用の上御吹聽願上候

麹町富士見町六丁目一五
帝國大學醫院御用　回陽舍
電話六百十五番

九版出來　一語千金　定價五錢　郵稅二錢

第貳　一語千金　定價五錢　郵稅二錢

右品揃居候

東京市京橋區日吉町四番地
民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價
一冊 金五錢 郵稅金五厘
半年(十二冊)前金五十錢 地方共 金五十六錢
一年(廿四冊)同金一圓 地方共 金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　吉崎圓吉
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

從五位子爵太田原一清君題辭
從五位木村正辭君題詠
細川侯爵母堂宏子君題詠
閨秀小說家三宅花圃女史題詠
閨秀小說家樋口一葉女史序文

日用百科全書 拾貳編

通俗書簡文

製本既成
全壹冊洋裝
木版密畫入
正價金廿錢
郵便稅六錢

挿畫 極彩色口繪 富岡永洗 寫眞銅版畫
●文かく樣●美人春夜讀書●箱根蘆の湖●嵐峽舟遊●京美人●御殿場の富士

書簡は達意を主とするも、又其人々の性質氣象を顯はすものなれば、男女共に心して等閑にすべからず、玆に通俗書簡の文躰を示し、男女貴賤、分に應じて心得べきものを丁寧懇切に網羅す。

日用百科全書目次

正價 一冊(二百五十頁)廿錢●六冊前金壹圓拾五錢●十二冊前金二圓廿錢●廿四冊前金四圓●郵稅各六錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA